報告書

地蔵祠・地蔵盆は今

報告書

地蔵祠・地蔵盆は今

もくじ

◆ シンポジウム「地蔵祠・地蔵盆は今」

シンポジウム開催趣旨　6

プログラム１　京都地蔵レクチャー　9

プログラム２　『地蔵盆』とコロナ禍を考える　25

ディスカッション　31

シンポジウムを終えて ―― 登壇者・パネリストからのコメント　46

◆ 論考・エッセイ

コロナ禍による京都市下京区「前田東町」の地蔵盆の変容　樋口摩彌　58

地蔵祠 ―― 路傍の建築　佐藤守弘　70

お地蔵様とキャラクター：身近な「子どもの守り神」　佐野明子　82

地蔵祠がとってもエモいから　多田 実　92
―― 価値主導型地域マーケティングの可能性

「地蔵」表象が映す社会　竹内幸絵　102
―― 昭和から令和、テレビ・コマーシャルと横尾忠則「20 年目のピカソ」から

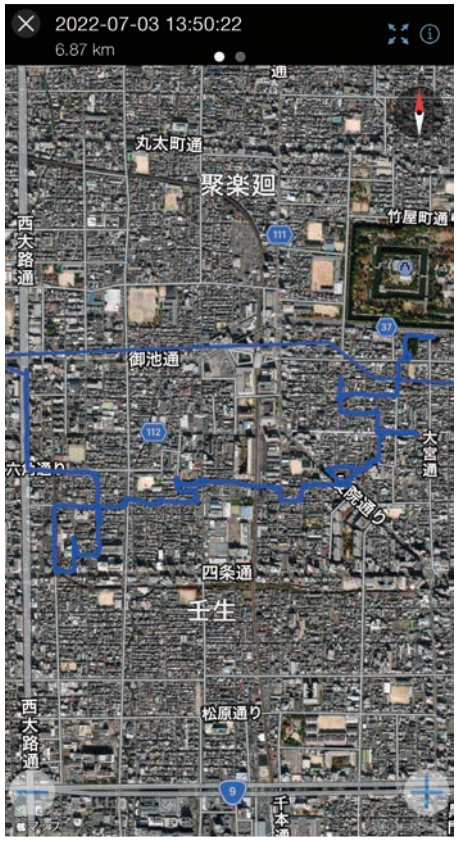
カメラは何を捉えたのか？ 小黒 純　116
～ＮＨＫ『新日本紀行　地蔵盆のころ』（一九七三年放送）

JoMA 地蔵ツアー中に撮影した写真（撮影：小黒純・佐藤守弘）

シンポジウム

地蔵祠・地蔵盆は今

京都各地に点在する五〇〇〇を超えると言われる「地蔵祠」、そして毎年、夏の終りに行われてきた子どもたちの祭、地蔵盆。その「今」を見つめる。



JoMA 地蔵ツアー（2022 年 7 月 3 日）の足跡

シンポジウム開催趣旨

江戸期に町のはずれにあった「地蔵祠（じぞうし）」は、近代になると整備された京都の「町（ちょう）」の中央に移設される。以降「地蔵祠」は「町」コミュニティの精神的、物理的なシンボル、祭事や防災の拠点、信仰の対象となり、守られ、慕われ、飾られる存在として持続してきた。とはいえ、地蔵祠は年々その数が減っているのが現状である。

一方でコミュニティの高齢化少子化に加え、コロナ禍により、年に一度の「地蔵盆」が、この三年間ほとんど開催できなかった。元来「地蔵祠」と深い関係を取り結んできた「地蔵盆」の危機も同時に考えないといけないだろう。

このシンポジウムでは、京都や滋賀の「地蔵祠」に関わった活動をしてきたアーティストによるキーノート・レクチャーののちに、「地蔵祠」を守る当事者からコロナ禍の三年間の現状をご報告いただく。そして行政で保存に携わる技師や研究者らが加わり、ともに「地蔵祠」と「地蔵盆」の「今」と「これから」を話し考えたい。

開催日時　二〇二二年一二月二日（金）一九時〜二〇時三〇分
配信URL　https://youtu.be/msb-gzYzXik

◆プログラム1　「京都地蔵レクチャー」　谷本 研（成安造形大学）

「地蔵祠」とは何か、京都でどれくらいあるのか、どのように親しまれてきたのか。写真や資料を基に京都の「地蔵祠」の基本情報を教えていただきます。

◆プログラム2　「『地蔵盆』とコロナ禍を考える」

コロナ禍以前の「地蔵盆」とコロナ禍後の現状を、町内会とおもちゃ業界それぞれの立場からご報告いただき、ご報告を基に、登壇者全体で「地蔵祠」の「今」と「これから」を考えます。

パネリスト

鴛淵晋一郎（おしぶち）（壬生東淵田町町内会元町内会長）
熊本盛行（熊本玩具社長）

コメンテーター

福持昌之（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課主任・文化財保護技師〔民俗文化財担当〕）
谷本 研（成安造形大学）
同志社大学ジャーナリズム・メディア・アーカイブス研究センター（JoMA）研究メンバー

司会

竹内幸絵

竹内幸絵　本日はシンポジウム「地蔵祠・地蔵盆は今」にご参加くださいまして、誠にありがとうございます。このプロジェクトは同志社大学ジャーナリズム・メディア・アーカイブス研究センター（JoMA）を母体としたプロジェクトです。「地蔵祠」あるいは「地蔵祠」という、京都の町でよく見かける有形物を中心とした地域のコミュニティについて考えるプロジェクトとして、二〇二二年四月にスタートいたしました。

しかし活動しておりますうちに、地蔵祠という有形物の維持継承はもとより、それを媒介とした行事である地蔵盆あるいは日常的なお祭りが、地域の高齢化に加え、この二年半のコロナ禍の影響を直接受けて、壊滅的な状況に瀕してしているということに、私たちは気がつきました。今回のシンポジウムは、そのような状況をまずはできるだけ多くの方に知っていただきたい、同志社大学の学生はもとよりその他の方々にも知っていただきたい、ということで催したものです。地蔵祠・地蔵盆の持続にどのような一歩が可能であるかについて、ご登壇のみなさま、そしてここにいます研究センターのメンバーとで話し合う会を、みなさまにも聞いていただきたい。そのような趣旨で始めさせていただきました。

それでは時間も限られておりますので、さっそく最初のプログラムに入りたいと思います。まず、京都外の方も聞いておられるかと思います。「地蔵祠って何？」という視聴者のために、ベーシックな知識について谷本先生にお話を伺いたいと思います。

図1

プログラム1　京都地蔵レクチャー

谷本研　谷本と申します。京都から見ると比叡山の向こう側、湖西にある成安造形大学に勤めております。僕の専門はアート、デザイン、アートディレクション、それからまんがも描いておりまして、アートプロジェクトのような活動もよく行っています。お地蔵様の専門家でも何でもないのですが、二〇年ぐらい前からずっとアートあるいはデザインを通して、お地蔵様に関わる活動をしております。つくり手としての視点から見たお地蔵様や、祠というものを、少し解説させていただきます。

1．プロジェクト事例より

子供が集めたくなる地蔵カード＆マップの作成

谷本　成安造形大学の近くには仰木という古い地域があるんですけども、そこにお地蔵様がたくさんあります。この地域は里山や棚田が残っているのですが、どんどん開発されてしまって、お地蔵様が移動させられたり、あるいはなくなってしまったりということが起こっているということでした。そこでちょうど二〇年前の当時、今のうちにそれらを調べたりお地蔵様の場所をマッピングして残していこうじゃないかということで、大学から始まったプロジェクトでした。学生や教員、職員含めて二〇人以上というたくさんのメンバーで仰木をひたすら歩き回って、お地蔵様をプロットしていく、マッピングしていくという活動でした【図1】。

当初はそのようにフィールドワークをしていたのですが、それらをまとめて何か形にしようとなったとき、僕は単なる研究者ではないので何か楽しい形にしようと思いました。当時思いついたことの一例が「お地蔵様

をカードにする」ということ。仰木のお地蔵様を勝手に選定して、それぞれカードを作りました。なぜカードを作ったかいうと、滋賀でも地蔵盆が八月二三日、二四日あたりに行われるので、地蔵盆に集まる子供たちに配るためです。地蔵盆といえば、子供たちにお供物のお菓子をお下がりで配ったりしますが、そこでよく配られるのが小さいポテトチップスだったりします。ポテトチップスといえば、プロ野球チップスをみなさんご存じでしょうか。ポテトチップスのおまけで野球選手のカードがついていたりして、それを集めることが子供たちは楽しい。このプロ野球チップスになぞらえてお地蔵様のカードを作ったら、これまでお地蔵様に興味がなかった子供も「これどこのお地蔵さんやろう？」と興味を持ってくれるんじゃないかという発想で、カードとマップを作りました【図2】。

図2

ちなみに仰木ではこのように田んぼのあぜにお地蔵様がおられたりして【図3】、全てに祠があったりするわけではないのですが、京都とまたちょっと違った形のお地蔵様、石仏を見ることができるという環境です。これが二〇年前に始まり、それからずっと続けてきています。

図3

アートプロジェクト「タイルとホコラとツーリズム」

谷本　そこから約一〇年ほど経ち、二〇一四年頃から中村裕太[*1]さんと、京都のお地蔵様と祠に注目した展覧会をしようという企画が持ち上がりました。タイトルが「タイルとホコラとツーリズム」と、少し変わった名前です。お地蔵様の祠はほとんどが木造ですが、京都では一部、タイルで装飾されたような祠があります。中村さんは特にタイルで飾られた祠に興味を持ちました。僕は、滋賀ではたくさんお地蔵様を見てきたのですが、京都にもたくさんお地蔵様があるということで、タイルの祠だけではなくもっと全般的に調べることにしました。展覧会を開催するギャラリー周辺の祠をひたすら歩いて調べまして、たくさんあるなかから僕が勝手に三三か所の祠を選定し、それらを「西国三十三所」になぞらえて「ホコラ三十三所」としました。そして三三か所それぞれに御詠歌をつくって、マップにしたわけです【図4】。ホコラ三十三所のなかで僕が勝手に第一番としたのが「北来地蔵祠」です。堀川通の四条通と五条通のあいだぐらいにあり、祠のなかでは珍しく大通りに面しています。この祠をリサーチした上で僕が勝手に御詠歌をうたっています。西国三十三所それぞれのお寺に御詠歌があるのですが、面白いのは、地蔵盆のときに、この御詠歌をうたうという風習。それになぞらえて、いかにも昔からあったかのように、僕が勝手にホコラ三十三所にも御詠歌をつくりました。この北来地蔵祠はどのようにうたったかといいますと。

ほくらいや
結いのほくらは　ほりかわに
みやこ焼けでも
永久にあれかし

江戸時代に「都焼け」といわれる大火がありまして、その後、北門前町と来迎堂町それぞれの町のお地蔵様をあわせて合同で祀った祠がこのこの北来地蔵祠とされています。この

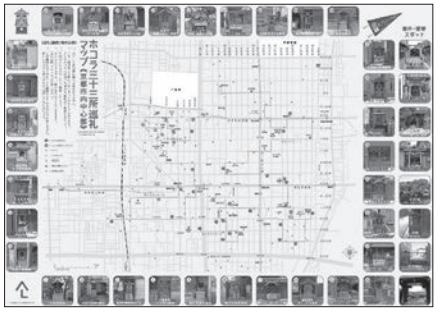


図4

＊1　京都在住のアーティスト。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。

ような歴史を調べて、御詠歌にしたためています。

ちょっと雑学豆知識にはなりますが、祠の語源は「神庫（ほくら）」だそうです。これが転じて「ほこら」になったということなのですが、それを、この御詠歌の中にも音韻として含めてうたっています。このような工夫をしてホコラ三十三所の御詠歌をつくりました。また、展覧会場ではミニホコラを作って三十三の祠を会場で巡ることができるという仕掛けをつくったり【図5】、ホコラ三十三所を実際にまわる巡礼ツアーも行いました【図6】。

そしてこの写真は、最初に中村さんと僕が一番面白いと思った、タイルで装飾された祠です【図7】。これは、京都では珍しいタイプです。一般的には木造のものが多いのですが、こういった工夫されたものも見られるということです。

図6

図5

そして展覧会は毎年開催していたのですが、五年が経過したときにこのような曼荼羅もつくりました。僕たちは京都だけではなくて、他の地域の祠も巡り、例えば沖縄にも行きましたし、そして台湾や韓国にも行きました。お地蔵様以外の祠も含めて、さまざまな地域を巡って見てきた祠たちを、絵にしたためたものです【図8】。中央には京都のホコラ三十三所の祠を描いています。それぞれの祠をアップで見ていただきますと、祠といっても本当にいろんな形があって絵にするのも楽しいものです。そ

図7

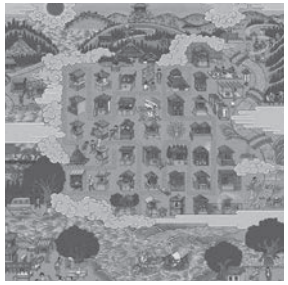


図8

の多様性が見てもらえると思います。

2．さまざまな地蔵祠――類型、数

地蔵祠の形状、お地蔵様のご利益

谷本　ここからが本題です。ホコラ三十三所のうち、いくつかをこのように並べてみました【図9】。あえてタイポロジーといいますか、類型学的に見られるように同じ条件で撮ってみました。こうして見ると、多種多様な祠があるということがわかってもらえると思うのですが、ただ、ある種の様式というものも見えてくると思います。例えば、台座があったり、卍のマークがあったり、屋根もいろいろな形がありますが、お地蔵様の祠には妻入りが多い。逆に平入りは屋根の一直線が見える側のことを指して、それは神様の祠に多いといわれています。もう一つ、特徴として面白いのは「道に面している」ということですね。「路傍祠（ろぼうし）」という言い方もありますが、多くの祠が道に面しているということが特徴的です。特に京都では、それは、当たり前に思えるかもしれませんが、神様や仏様、神聖なものは、普通はお寺にあったり教会にあったりするものです。それが町中にあるというのはとても面白い状態だと思います。道端の祠というのは一応世界じゅうにもあり、例えばヨーロッパやアジアにも多い。英語ではそのままですが、way side shrineというそうです。ただ、京都が世界でも最も道端の祠が多いのではないかと思っています。

そして、お地蔵様のご利益、役割について。みなさんご存じのものも多いと思いますが、一番多いのは「町内安全」という意味合いだと思います。「町内安全」とそのまま祠

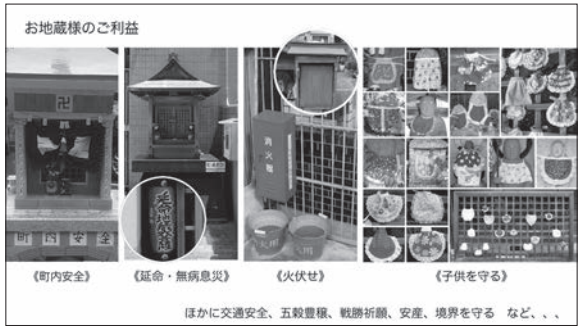


図9

に書いてあるものも多いです。また、「延命地蔵尊」という提灯がぶらさがっているものもあったりします。延命や無病息災、健康を祈るという意味合いがあると思うのですが、この祠（図9の左から二つめ）にはAEDのマークがあり、祠のすぐ横にAEDが置いてあります。これは目印として、「お地蔵様のとこに行けば、命を救ってくれる」という意味合いが強く、面白い例だと思います。

それ以外にも、火伏せの意味合いがあります。火の用心ですね。この写真（図9の左から三つめ）、丸い部分は祠のすぐ近くに設置されているものです。蓋は開けていないですが、おそらく開けると愛宕さんの御札が置かれていると思われます。愛宕さんというのは火の用心の神様として有名です。愛宕さんこと愛宕権現は、その正体は実はお地蔵様とされています。勝軍地蔵というお地蔵様が、愛宕さんということです。その愛宕さん信仰とお地蔵さまの信仰が、重なっている。それで、祠の近くには消火器や防火用のバケツが置かれている例がとてもたくさん見られます。もちろん、祠自体が燃えてしまわないようにという意味合いもあるとは思いますが、「そこに行けば消火器があるんだ」ということが町内の目印になってるということが言えると思います。

それから、一番大きいご利益としては「子供を守る」存在としての祠ですね。お地蔵様といえば、よだれかけをされていますが、よだれかけはやっぱり子供のイメージです。このよだれかけに子供の名前を書いて、地蔵盆のときに新調するというような風習があったりします。それから地蔵盆といえば子供が集まり子供が主体となって飾り付けをして——今はちょっと違うかもしれないですけども——、子供たちのお祭りとして行われています。それからもう一つ大きな意味合いは、古代からの道祖神信仰です。境界を守る道祖神信仰は、仏教が伝わる前からありました。道祖神信仰とお地蔵さまの信仰が習合することによって、お地蔵様には「境界を守る存在」という意味合いもあります。

お地蔵様や祠の数、数え方

谷本　それから、お地蔵様の数について調べてきました。通説では五〇〇〇か所以上あると言われています。各町ごとにお地蔵様があったりしますが、京都市の町数は国勢調査によると六三〇〇町あるということです。そうすると、五〇〇〇か所以上お地蔵様があるというのが、正しいのかなと思われます。ただし各町ごとといっても、各町に一つずつ祠があるというわけではないですし、二つある場合もあれば、三つある場合もあるし、ない町もあります。なので、ぴったり町の数と一緒というわけではありません。

森篤さんという方はGoogleマップで「京都のお地蔵さんmap」をつくっておられます【図10】。森さんは、日本全国たくさんの地蔵祠を見ておられると思うのですが、特に京都を見ておられます。ご本人の了承もいただいて図をここにお見せします。この地図で数えますと、京都市内だけで三六七六か所のポイントがあります。森さん曰く、まだ全部網羅できていないそうです。それでもこれだけある。ということは、恐ろしいほどの数があるということが、この地図でわかっていただけると思います。また花園大学などの調査では、京都市内に一万体以上のお地蔵様があるだろうということです。

このようにそれぞれ数が違うのは、おそらく、祠一か所にお地蔵様が一体、とは限らないんですね。二体ある場合もあるし、たくさん集まっている場合もあります。ですので確かにお地蔵様が一万体以上というのは間違いではないと思います。

また雑学、豆知識になりますが、仏さんや石仏の数え方、単位はご存じでしょうか。石仏は、一尊、二尊と数えます。一つの祠において、お地蔵様だけではなくて例えば大日如来も一緒にまつられている祠も多いのですが、そういう場合は「二尊おられる」というような言い方をします。それから、祠の数え方も調べてみました。これはほとんど使

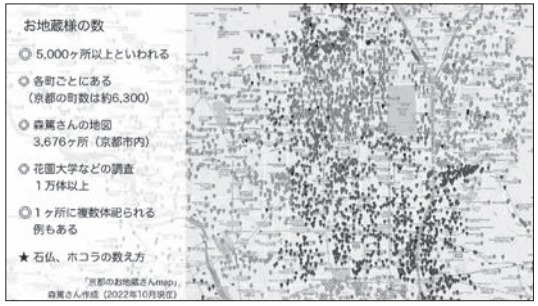


図10

われないと思うのですが、祠の単位は「宇」と呼ぶそうです。一宇、二宇と呼ぶそうです。堂宇という言い方もしますが、祠の数え方はは正しくは「宇」だそうです。

3. お地蔵様の経歴

民間・武士に広まった地蔵信仰、掘り出される石仏

谷本　次に、歴史といいますかお地蔵様の経歴について、調べてみました。村上紀夫さんという方が『京都地蔵盆の歴史』（法藏館、二〇一七）という本を書いておられて、そこから主に要約させていただきました【図11】。『京都 地蔵盆の歴史』刊行のきっかけは、我々のアートプロジェクト「タイルとホコラとツーリズム」に刺激を受けてのことだったとあとがきに書いていただいています。これを僕は自慢にしています。というのも、僕は二〇年前からお地蔵様に興味を持ちはじめたのですが、詳しく知りたいと思っても、なかなか自分が思うようなお地蔵様について書かれた本がありませんでした。

そう思いながら活動していたところ、自分たちの活動がきっかけとなって、僕が求めていたような本ができた。これも、一種のアートの力なのかなと自負しております。

話が反れましたが、古代からお地蔵様の信仰は日本に伝わっています。仏教の伝来とともに、お地蔵様という存在は日本に伝わっています。当時、経典あるいは仏教説話などを通じて地獄の概念が伝わり、民間にも地蔵信仰が広がったということ。そして中世――かなり粗い括り方ではありますが――、武士の間でも信仰が広がりました。武士といえば、殺生や死と隣り合わせの存在ですから、お地蔵様の信仰が広がったのかなということがいえると思います。そして当時、石仏が多く作られました。

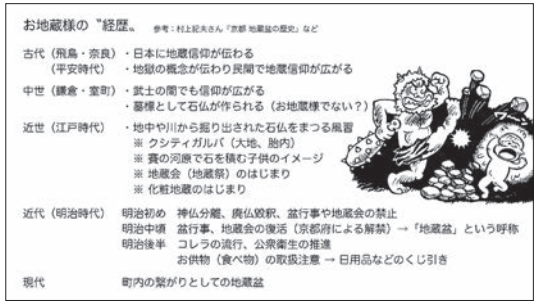


図11

これは墓標として、または亡くなったしるしとして、石仏が多く作られたということです。ただ当時それがお地蔵さまだったかどうかはわかりません。というよりも、おそらく阿弥陀さんやお釈迦さんなど違う仏様の石仏が多かったのではないかと思われます。ですから、この時代の石仏が、直接現代のお地蔵様と繋がっているわけではないのです。そしてそこから繋がるのが近世なんですけれども、地中や川から掘り出された石仏をまつる風習があったそうです。特に子供たちが、土から掘り出したものをまつる。一種の「はやり神」と言いますけど、流行です。流行として、そういう風習があったとされています。これが、今の地蔵盆に繋がる「地蔵会」あるいは「地蔵祭」の始まりとされています。地中から石仏が掘り出されるということ、不思議に思われるかもしれません。当時は鴨川や桂川の氾濫がありました。そしてまた、河川敷は葬送の地だったんです。なので、川から墓標が流れ着いたということはあり得ると思いますし、近世には土木工事がたくさんありました。あるいは、井戸を掘ることも。そういう背景から、お地蔵さまが地中から掘り出されることがあったようです。

禁止された地蔵会が再開、盆行事と結合する

谷本　お地蔵様の語源、由来についてです。お地蔵様は、サンスクリット語で「クシティガルバ」と言います。クシティが大地という意味。ガルバが胎内という意味です。「地中から生まれる」というようなイメージがあります。なので、地中から掘り出される、地中から発見されるということがお地蔵様の霊験を高めたという意味合いがあるのではないかと思います。昔からそこにあったお地蔵様ではなく、地中から出現したといういうところがすごく大きいのではないかと思います。

そして、僕のイラストもスライドに載せてみました。賽の河原で石を積む子供のイメージです【図11】。お地蔵様は、賽の河原の子供たちを救ってくれる、救済してくれるという説話があります。そういったイメージも、川から見つかったお地蔵様をまつるということに繋がっているのではないかと思います。

それから、掘り出された石仏というのは、顔かたちが

あまりはっきりしていなかったりします。川に流されて、あるいは雨風にさらされて、お顔がはっきりしない。もちろん阿弥陀様かもしれないしお釈迦様かもしれない。そのため、絵の具で顔を描いて、お地蔵様に見立てる。そこから、現代の化粧地蔵が始まったのではないかという説もあるようです。

そして近代、明治初めになると、いわゆる近代化のために神仏分離であるとか廃仏毀釈、そして特に京都府では盆行事や地蔵会が禁止されました。お地蔵様をどこかに処分しろとか、今でいう地蔵盆をしないようにというお触れが出たわけです。それで、移動されたお地蔵様もあったとは思われるのですが、信仰心はそれで消えるわけではありません。人々のなかでは、それでもお地蔵様のことを信仰していました。そして明治中頃、京都府が解禁をすることによって、盆行事――地蔵盆だけではなくその他のいわゆる盂蘭盆会――が復活します。それまでは「地蔵盆」とは呼ばず「地蔵会」と呼ばれたり「地蔵祭（まつり）」や「地蔵祭（さい）」と呼ばれていましたが、このとき盆行事と一緒に地蔵信仰が解禁されたことによって、「地蔵会」が「地蔵盆」と呼ばれるようになったのではないかという説もあります。特にその当時、新聞などに「盆行事が再開する」ということが報道されており、そこで「地蔵盆」という呼称が一般化したのではないかということです。「地蔵盆」という言葉は昔からあったのですが、一般化したのはこの頃ではないかなと思われます。

あと村上さんの著書で面白い指摘があります。明治後半に、コレラの流行がありました。感染症ですね。地蔵盆のお供物といえばそれまでは食べ物が中心だったのですが、コレラが流行したとき、食べ物はやっぱり衛生上よろしくないと。公衆衛生を推進しようということで、お供物が日用品に変わっていったりしたようです。日用品などのくじ引きが、ここから始まったのではないかという説を書かれています。これは、コロナ禍における現状に少し繋がるものがあるのではないかと思います。

そして現代、すごく大雑把な言い方ですが、「町内の繋がり」としての地蔵盆が続いています。戦時中は、地蔵盆を禁止されることはなかったようです。というのも、地蔵盆というのは町の団結に繋がり、町の団結は国の団結に繋がるということで、国にとっても行政にとっても、都合のいいものとして扱われており、地蔵盆は禁止されなかったのかなと思われます。以上、お地蔵様の経歴でした。

4．お地蔵様の置かれた場所

地蔵と番人、床屋との関連性

谷本　次は、お地蔵様の置かれた場所についてです。これは近世の絵巻です【図12】。祠が描かれた絵は多くないのですが、いくつか興味深いものがあります。この絵巻は三条油小路町という通りを描いたもので、右側が北、つまり三条通側です。そして左側が南で、六角通側です。三条通の入口みたいなところに、祠が描かれています。祠の右側を見ていただくと、何か門のようなものがあります。これが木戸門といいまして、当時、夜になると閉まり町を守る木戸門が置かれていたんです。その木戸門の近くに、祠があった。そして木戸門の近くには他に、チリ溜め――ゴミ箱――があったり、あるいは門番がいたりしたわけです。町を守っていた番人と祠が、近しい存在だったということが言えると思います。

余談ですが、京都の町中には、角地の床屋さんが多いんです。町を歩いているとお気づきになる方もいると思うのですが。これは、木戸門の名残ではないかというふうに思われます。どういうことかといいますと、木戸門の横には門番である番人がいたのですが、番人は副業として髪結いをしていたのです。なのでその髪結いの名残が、今の理髪店・床屋になっているのではないかと思われます。その結果、床屋さんの近くに祠が見られる例も多い印象です。

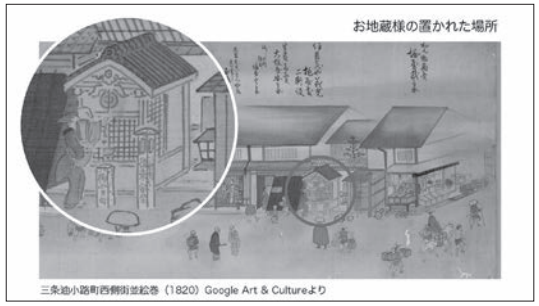


図 12

5. 地蔵祠の変容

信仰対象から資料へ

谷本　地蔵祠の変容を、僕が勝手に選定したホコラ三十三所を中心に、具体的な事例としていくつかお見せします。

これは、京都文化博物館前にあったお地蔵様です【図13】。二〇一四年、僕がプロジェクトを始めた頃にツアーをして撮った写真が左側です。この祠は、数年後になくなってしまいました。なくなって、どこに行ったかというと、京都市に寄贈されました。祠だけではなく、地蔵盆関連の資料も全部寄贈されたそうなんです。そして二〇二〇年には京都市歴史資料館で展示されておりました。大切に保管されたのですが、信仰されていた祠が、資料に変化してしまった事例です。

それからこれは二条城の南あたりにあるタイル祠なのですが、建物に埋め込まれたような状態の祠でした【図14】。これもホコラ三十三所のひとつで御詠歌もつくった祠だったのですが、数年後、右の写真のように建物が取り壊され空き地になってしまっていました。右の写真は、ちょうど佐藤守弘さんと一緒に歩いてるときに見つけて「あ！」と驚いたのですが。写真の時点では空き地でしたが、この後新しい家が建ち、今はさらに違う環境になっています。それでも祠だけは、綺麗に保存されたという事例です。

図 13

図 14

祠の造り替え、移動と合祀

谷本　これは西ノ京勧北町の早縁（そうえん）地蔵尊で、これもタイル祠だったのですが、現在の写真がなく、Google ストリートビューから拝借してきました【図15】。祠には由緒書きがあります。昭和三〇年代に作られて、昭和五〇年代に修理をし、そして令和元年にタイル祠が古びて傷みが進んでしまったので、新しく新調したというようなことが書かれています。僕個人としては、モノとしてタイル祠にとても魅力を感じていたので少し残念だったのですが、このように変化している祠もあります。

次は、京都駅の東側、須原通にある祠の姿です。この左の写真は、祠の本体がなくなってしまって台座だけが残っています【図16】。これも、タイルで装飾された台座です。二〇年ほど前におそらく既に祠本体はなくなっていたようです。地域の方に聞いてみると、祠本体は、二〇〇一年頃に新しく建てられた市営住宅の敷地に移動されたよ、とのことでした。右側の写真に四宇の祠があります。左から二つ目の祠が、どうやら左の写真、青いタイルの台座にあったようです。これは、地域の方への聞き取りからわかりました。他の三宇の祠はまた別のところから持ってこられて、今は、あわせてまつられているということですね。近年はもう地蔵盆もあまり大々的に開催されていないようなのですが、ここに集めてまつり、ここで地蔵盆をするようになったということです。

図 15

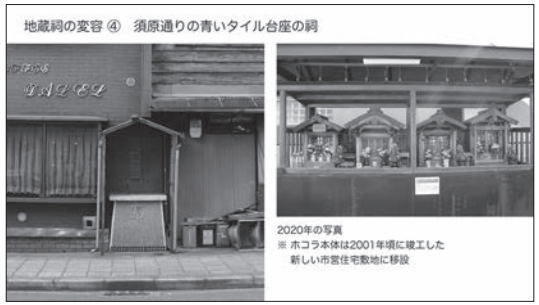


図 16

6．近年における地蔵盆の様子

日程、プログラムなど

谷本　実際の地蔵盆の様子も紹介します。ただ、今回僕は京都の地蔵盆についてお話をさせてもらっていますが、僕自身、京都の地蔵盆は数回しか見ていません。どうしてかといいますと、ホームグラウンドが滋賀県なので、滋賀県の地蔵盆に参加すると、どうしても京都の地蔵盆には行けないのです。これは同じ時期に行われるので仕方がないのですが、ある種、これが地蔵盆の本質ではないかと勝手に思っています。自分の地元の地蔵盆に参加すると、他の地域の地蔵盆を知るのは難しい。そういう面があります。それでも唯一、京都で参加できた地蔵盆が二〇一四年でした。京都で町内を歩いていますと、いろんなところに、こういった地蔵盆のプログラムが模造紙で貼られていたりします【図17】。これを見ると日付もわかります。多くは八月二四日。この年はたまたま日曜日と重なっていたので、八月二四日に行われた地域が多かったようです。もっと昔は、八月二三日から二四日、二日間かけて開催していたところが多いようです。二三日が飾り付けで、お地蔵様を祠から出して近くのガレージやどこかに祭壇を設けます。そしてそこで二日間にわたって地蔵盆を開催するので一晩を越すうえで誰かがお地蔵様をずっと見張っておきます。お地蔵様の番をするというのも、地蔵盆の風習としてあったようです。

これは実際に地蔵盆が開催されている様子の写真です【図18】。右に見える祠の中からお地蔵様が運ばれて、ガレージ奥の祭壇に移動しているという状態です。他には、手作りの行灯を作ったりします。また、よく行われるのが数珠くりです。大きな数珠をみんなでたぐるという――一〇八回まわすところが多いようです――地蔵盆の代表的なしきたりですね。

図 17

お地蔵様の貸し出し

谷本　最後のエピソードです。実は京都では、お地蔵様の貸し出しも行われています。スライドは、地蔵盆の時期ではなく僕と中村さんのアートプロジェクトの際の写真です【図19】。壬生寺さんはご本尊がお地蔵様なのですが、そこにたくさん無縁の石仏が集められています。その石仏を、壬生寺さんが貸し出しされています。どういうときに貸し出すかというと、新興住宅地だとかマンション、お地蔵様のない地域で地蔵盆を開催するときに、壬生寺さんが特別に石仏を貸し出すそうです。通常は車で運ぶことが多いと思うのですが、僕たちは背負って運んでみました。京都市役所前のゼスト御池という地下街にお地蔵様を運んでそこで季節外れの地蔵盆をするという、京都市から依頼を受けたイベントでした。そして、同じくそのプロジェクトではお地蔵様のお化粧もしました。先ほど化粧地蔵のお話もしましたが、このように子供たちが

図 18

図 19

図 20

思い思いに原色を使って、お地蔵様にお化粧をしていきました【図20】。お顔がはっきりしない石仏なので、こうやって、子供たちがお地蔵様と触れ合うきっかけにもなったと言えます。

とりとめのないお話になりましたが、以上です。

ディスカッション　1

信仰から資料へ――お地蔵様の魂を抜く

竹内　アーティストという視点から独特のアプローチでお話いただきました。地蔵が一万体以上あるということ、三六七六か所という地図は圧巻でした。後半にあった京都文化博物館前の地蔵祠が移築されたというお話も、非常に印象的でした。文化財にはなったけれども、もう信仰の対象ではなくなったということですね。

佐藤守弘　京都市に納められるとき、お坊さんが来て魂を抜かれました。モノに戻して文化財にするということが、京都市歴史資料館の展示で説明されていました。

福持昌之　あれは京都市歴史資料館が担当したお仕事でしたので、歴史資料館の職員がずっと対応していましたが、私も受け渡しや交渉、ご相談の際には同行していました。

竹内　これが象徴的なお話だなと思います。文化財あるいは「アート」と言ってもいいかもしれないですが、形あるモノの姿で地蔵が残るということは、非常にいい方向。しかし、谷本さんのエピソードにもあったような地域の中心――ＡＥＤが示してあったり、消化バケツが置いてあるような――としての地蔵祠、そしてもちろん地蔵盆の中心的役割、それが魂を抜かれて終わってしまった地蔵が存在している。続いていくということはどういうことなのか、先ほどのお話にとても象徴的なものを感じながら聞かせていただきました。

そこで、次のお話に移りたいと思います。鴛淵（おしぶち）さんはお子さんの頃から楽しく地蔵盆に参加されていたのかと思うのですが、実際に、地蔵盆あるいは地蔵を「守る」という立場でいらっしゃいます。

プログラム２　『地蔵盆』とコロナ禍を考える

パネリスト・鴛淵晋一郎からの報告

鴛淵晋一郎（おしぶち）　鴛淵でございます。私は戦中の最後に生まれました。生まれた頃と、今の状況が、すごくよく似てるのかなと。もちろん赤ちゃんの時ですから記憶はありません。ただ、戦争ではないでしょうけどコロナということでいろんな行事がなくなっちゃったわけですよね。これからそのまま廃れてしまうのか、それともまた少し復活するかというのは、それこそこういう時代ですから、みなさんが自由に考えられることだと思います。

私の経歴としては、二〇代後半の頃に副会長を二回――当時は七年ごとでした――、そして会長は五年ごとで五期ぐらいやったのかな。各町内会も定年というものがありますので、それで会長を辞めました。

戦後の地蔵盆と子供たち

鴛淵　私が子供だった頃の目線から、少し昔の思い出話をします。夏休みは、とにかく「なんでこんなに暑いのか」という感じでした。クーラーもないです。そして子供たちは外に多かったですしね。子供たちを外で遊ばせる、そういう時代背景でした。

地蔵盆は「児童盆」だと、私は幼稚園の頃ずっと思っていました（笑）。お菓子をもらったりしますから。子供の頃はもう、夏休みバンザイですから。夏休みといっても、始めはいいんですよね。京都の真ん中では祇園祭をやっていますが、小さい頃はあんまり祇園祭に行きません。まあとにかく子供の頃は夏休みに遊びほうけちゃって。京都っていうのはまたよくできたもんで、大文字がちょうど夏休みの真ん中へんにあるんですよね。

大文字の送り火が消えるとまあ、子供心に寂しい。なんで寂しいかというと、宿題がたくさん残ってるからなんです（笑）。そしてその一週間後に地蔵盆です。土日に地蔵盆はありました。まず、宿題の山を片づける。それと、地蔵盆でおやつもらったりまた遊びほうけたりできて、またそれがちょっと楽しい。そういう時代でした。

戦後の地蔵盆で、当時は娯楽も何もなかったのであとづけで演台を作って喜劇役者や漫才師がやってきたり、マジックショーをやったり、映画をやったりね。そういう時代がありました。それと、よくあんなことをやっていたなあと思うんですが、ちょっと景気が良くなった頃は地蔵盆にバスツアーでヘルスセンターへ行ったりしました。まずは比叡山にバスで行って夜景を見て、それから将軍塚へ行ったり。今じゃ考えられないことをやっていました。今同じことをすると、もう危なくてしょうがないでしょう。今やったら、保険もむちゃくちゃかけないかんと思います。それで当時は、ヘルスセンターにはご老人とかが喜んで一日過ごしていたり、それから水泳に行ったり。今では考えられないことをやってました。

少子化と人口減少を受けて行った工夫

鴛淵　その後、だんだん規模が縮小して、時代とともに人口が減ってきた。子供の数が減ってきて。我々が子供の時は、三〇人ぐらいが道端で遊び回ってたんだけど、その後、クーラーができてね。地蔵盆の飾り付けにいるのはもう、ご老人や役員ばっかりです。子供たちはね、おやつもらったらすぐ家に帰って、クーラーの前でテレビ見てるか、ゲームしたり、そんな様子です。

ただ、私が役員を始めて、やらなければならないのは工夫して地蔵盆をすること。人は集まりますよね。だから、そこで工夫してゲームしたり、福引も非常に工夫して。役員になって初めの頃、まさに今日いらっしゃる熊本さんのお父さんがやっていらっしゃった店を、二回ほどお邪魔したことあります。女性陣がそういうおもちゃを買いに行ったりした時代もあります。だんだん子供が少なくなってきたら、もう、福引なんていうものじゃなくて、もう初めから「この子にはこれ」というあてがえをする。一律にあげる。誰が引いたってそれが当たるようになっているわけです。そういう時代になってしまいました。

コロナ禍の課題、時代の変化による問題

鴛淵　そして、今度はコロナです。今現状としては、ほぼ中止。私も何人か京都在住の方にお聞きしたんですが、やっぱりほぼほぼ中止。お坊さまをお呼びしてお経を唱えていただくということは、一応、半分宗教行事のようなものでもありますし、それは続けてやっているけど、でも地蔵盆はほとんど今ゼロだと。来年か再来年かわかりませんけど、こういう時期が過ぎて、再開されるのであろうか。先ほど谷本さんからもそういう話がありましたけど。宗教的な意味で、お地蔵さん（を祀ることを）辞めてしまうっていうのも、なんかいろいろ考えることがありますよね。別に崇りとは言いませんけど、片付けちゃって何かあったら「そのせいや」となり、それは困ったもんだろうし。

こんな感じで、今非常に苦しんでいるというか、逆に新たに何か考えることができるのかと思います。まあ言ってみれば、私はこの会に呼ばれたとき、みんなでどこか一室に集まってしゃべるのかと思っていたら、みんなバラバラですね。お互いのお顔はずっと見ることができるんですけど、実物に会っていないという。バーチャル空間に立たされ、非常に不思議な感じなんです（笑）。逆に、一室に集まって並んだら、みなさんのお顔は横からしか見えないけれど、これは真正面の顔しか見えないという。変な時代になりました。

ただひとこと言いますと、今は役員さんにも女性が多いので、片付けとかテント（設置）とか、貸し物を借りてきたりが大変です。それを省力化することも何かこれから考えなければならない。そういう問題が出てきていますね。そんなところでございます。長々とありがとうございました。

＊　＊　＊

竹内　ありがとうございました。歴史的なことを谷本さんから聞いたうえで、鴛淵さんのお話を聞くとぐっときましたね。マジックショーなんかがついていた地蔵盆だ

とか非常に盛り上がった時期もあったとのことです。しかし、コロナで大打撃を受けていて、鴛淵さんの周りでも、ほとんどもう実施されている町がないというようなことになっているわけです。ここで、次にお話を伺いたいのが熊本さんです。熊本さんは今鴛淵さんからもお話いただけましたが、おもちゃ屋さんである熊本玩具を経営されています。もうずっと前、昭和のはじめからでしょうか。おもちゃを地蔵盆に提供するというような形で、地蔵盆と関わってこられました。三年続けて地蔵盆がほぼ開催されていない。この状況のなかで、熊本さんがなさってきた活動について、写真も交えながら伺いたいと思います。熊本さんご自身も小さい頃に、地蔵盆がとても楽しかったという話を事前に聞かせていただきました。そのような体験も踏まえてお話いただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

パネリスト・熊本盛行氏からの報告

熊本盛行　こんばんは。千本三条で熊本玩具を経営しております。先ほどお話いただいたように、もちろん仕事で地蔵盆に深く関わっていることは事実なんですけども、私はもう子供の頃から地蔵盆が大好きでした。来年六〇歳で還暦を迎える私なのですが、小学校高学年ぐらいまで、町内会みんなで集まる年に一度の地蔵盆が本当に楽しみで楽しみで、もうワクワクしておりました。

子供の頃――町内での子供どうしの関係

熊本　私は小学校の頃まで、千本三条ではなく、壬生馬場町というところに住んでおりました。私の兄弟は五人います。そしてここの町内には、私の年齢から上下、五～六歳を含めると、先ほど鴛淵さんが言わはったように三〇人ぐらいは子供がいたんちゃうかなと思っております。町内会では、みんな「○○おにいちゃん」「○○おねえちゃん」と呼び合って、本当に縦と横の繋がりが

しっかりあって、みんなとても仲良かったような気がします。その頃ですかね。初めて経験したのがスイカ割り。お菓子くばりやおもちゃの「ふごおろし」ですね。私にとって、本当にもう一生忘れられないような思い出です。

コロナを経て消極的になる町内会

熊本　今年で三年目となりました新型コロナの影響によって、おもちゃ屋の繁忙期であります夏休みの売上は激減しました。地蔵盆もしかり、夏祭り、そしてイベントの景品はもちろん、プールや浮き輪やレジャー玩具、そして花火に至るまで。夏全体としては、（例年の）半分もいかなかったという売上にまで落ち込んで、これが実は、三年間続いております。

今年四月の初め頃だったかな。お店に来ていただけるお客様たちから「今年は地蔵盆できそうかな？」「子供たちも、もうそろそろかわいそうや。今年は開催してあげたいな」という声が出た半面、「準備できるのかな？今年の役員は誰や？　何からしたらいいの？　面倒だなあ……」という声も多く耳にいたしました。年に一度の地蔵盆が二年連続で中止になったことで、今年開催をしようと思っても、町内会の役員さんたちは消極的になっているんだなと思いました。

地蔵盆の復興に向けて――イベントの実施

熊本　これはなんとかしなあかん、何とかして今年こそは、という思いで、町内会の役員さんに向けた「京の地蔵盆・夏祭り相談会」というものを七月一日からゼスト御池で三日間行いました【図1】。私ども熊本玩具や高木商店さんなど志を同じように持っている人たち、そして壬生寺さん、多くの企業や団体様にも協力していただきまして、何とか開催することができました。しかし、このイベント告知が遅かったことや、夏頃にまた

図1

新型コロナが拡大してきた影響で、多くの方のご来場は叶いませんでした。が、来ていただいた方には、非常に喜んでいただけたかなと思っております。実際、いろんな相談も受けましたし、皆さんの貴重なご意見を来年に生かしたいなと思って「第一回」と銘打ちましたので、「来年にも開催します！」という言葉を皆さんには残せたかなと思います。

そしてその後、八月中旬には「地蔵盆・夏祭り体験イベント」を、同じゼスト御池で二日間開催しました。こちらも壬生寺さんや知り合いの会社・団体等にご協力いただいて、何とか開催することができました。壬生寺のお坊さまによる数珠まわし体験や、我々の友達企業によるワークショップ、そして私の大好きなお遊びイベント、ステージをお借りしてお子様の発表会、そして盆踊りのやぐらまで用意させていただきましたので、二日間夜六時からは盆踊りもしました。こういったことで地蔵盆・夏祭りの体験を、多くの子供さんたちに楽しんでいただきました。二日間で延べ四〇〇人ぐらいが来たかなと記憶しています【図2】。

体験イベントでの子供たちの声

熊本　このイベントを開催してわかったことは、大きく二つあります。京都のお子様だけでなく、その親御さんが、地蔵盆を知らないんですよ。「京都の人間と違うんかな？　地蔵盆というのを見たことないのかな？」と思いました。また、本当に皆さん楽しんでいただきましたので、こんなふうに楽しくて安全なイベントをみんなが待ってるんちゃうかなと思いました。子供さんたちに、「おじちゃん、今度いつすんの？」と、正直な言葉を聞いたことに対して、「来年するよ！」と言いました。そういう勇気も、湧いてきました。

今の言葉通り、来年は今年以上にパワーアップした相談会と体験イベント、二つのイベントを開催して、京都の伝統行事である私の大好きな地蔵盆を、ちょっと大げさですが、後世に繋いでいくお手伝いをしていきたいなと思っております。来年もやりますので、ぜひご協力お願いいたします。

ディスカッション　2

地蔵盆に京都の大学生が参加することの可能性

佐藤　YouTube に視聴者からの質問がきています。

師茂樹（花園大学）

こういった地蔵盆イベントには、大学生の参加などはなかったのでしょうか。日本文化を学ぶ留学生（コロナ禍では少なくなってますが）や、仏教系大学の学生などは、参加する意義があるようにも思います。

熊本　うちの店舗にもアルバイトで大学生に来ていただいております。その大学生にいろんな話を聞きますと、やっぱり大学生も地蔵盆を知らないんですよね。京都の人間であったとしても、「全然記憶ないですよ」とかいう話をよく聞きます。「せっかく京都の大学に来て学んでいるのに京都で地蔵盆を知らないって、おかしいんちゃうの？」と、ちょっとそんな話をしたりしてたんですけども。私も東京の大学に行っていたものですから、東京では「地蔵盆ってなんやねん？」と言われていました。京都の大学生であれば、ぜひ参加してやっていただきたいなと思っております。

竹内　開催されたイベントには、仏教系大学の学生が来たというようなことはなかったのですね。

熊本　なかったです。

竹内　同志社の学生が熊本さんのイベントのお手伝いをさせていただいたという話も聞きました。今日、その学生が聞いてくれているといいなと思うんですけれども、あれは地蔵盆とは関わりのないイベントだったんでしょうか？

熊本　はい。あちらこちらのイベントがなくなっていくなかで、知り合いの方が

図2

立ち上げたイベントにも参加させていただいてはいるんですけど、どうしても人手不足のところに同志社大学の学生と知り合うことがありました。ゼスト御池での、ハロウィンイベントのボランティアでした。

竹内　大学生の参加というところで少し口火が切られましたが、谷本さんの大学の学生はどんな感じでしょう。

谷本　地蔵プロジェクトには当初は学生も関わっていました。一緒に合宿をして、そして地蔵盆に向けて手作りランタンを作って、地蔵盆の日に灯す、というような活動もしていました。当初の学生はどんどん卒業してしまうので、新たに何年かは新しい学生を入れていたんですけど、だんだんと自分たちでやるようになっちゃっていましたね。

竹内　なるほど。福持さんにもお尋ねします。福持さんは、『京都の祭り・行事―地蔵盆とコロナ禍の地域行事―』（京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会、二〇二二）という立派な冊子を作っておられます。これを作られる際、何か大学生が関わるような機会はございませんでしたでしょうか？

福持　この冊子を作る際にはそういったことはなかったのですが、冊子の中心は、神谷潔（かみやきよし）さんという写真家が二〇～三〇年ずっと撮影してきた地蔵盆です。そのなかに、「名人・達人を招く」という写真がございまして、そのなかを見ると、大学の落語研究会であるとか、アクロバットやジャグリング、高校の吹奏楽部とか、地元の主催者がそういったグループに来てもらって子供さんに見せて楽しんでもらっている、そういうシーンが結構あります。地蔵盆の運営そのものに関わっているわけではないですが、学生が一端をお手伝いしている、お楽しみの一部を担っているという事例はありました。

竹内　なるほど。同志社の教員のみなさんはいかがでしょうか。京都にはこれだけ地蔵があり、また京都には大学が本当にたくさんございます。この二つが何らかの繋がりを持つというのは、鴛淵さんがお話されたような一旦衰退してしまったものがもう一度広がっていくための、一つのヒントにならないかと考えたりしました。福持さんが先ほどおっしゃった落語研究会も同志社大学にはありますし、あと、ヒーローショー同好会のような

サークルもあります。お子さんが喜んでくださることを目指した活動やボランティアチームがあります。そして彼らは、何より若くて力持ちですので、鴛淵さんがおっしゃってるような女性の町内会長さんをお手伝いするというのには適切だなと勝手に思ったりするんですが。佐藤さんの今の学生や前任校（京都精華大学デザイン学部）での学生には、絵を描くことで貢献したいというような人はいないでしょうか。

「見せる」祇園祭／クローズドな地蔵盆

佐藤　今の大学では絵を描いている学生はいないんですが、なかなかやっぱり、地蔵盆自体が認識されていない。もちろん、地蔵盆というものが閉じられたものであり、先ほど谷本さんがおっしゃったように、一つの地蔵盆に参加したら二つは掛け持ちできない。非常にクローズドなものではあるという点はあります。コミュニティのものだからこそ、それがある意味で開きにくい理由ではあるのかもしれないです。祇園祭ではそれぞれの山鉾に大学生が参加するというのが京都精華大学でも同志社大学でもあると聞いていますが、あれは「都市の祭り」なんです。これは別の研究会で聞いた話ですが、柳田國男は、都市型の祭りと村の祭りを比べたときに都市型の祭りには「オーディエンスが登場する」ということを言っていたんです。スペクタクルになるというか。祇園祭も鉾町ごとでやっているけど、ある程度オープンな部分がある。

竹内　そうですね、祇園祭は「見せるもの」ですよね。

佐藤　地蔵盆はそれこそ町のものであり、それが強さでもあり、もしかしたら弱さでもあるのかなと。

竹内　実は私たちもこの夏、数少ないけれども地蔵盆を開催されたところに取材の申し込みをさせていただいたんですね。学生と一緒に行くことになり、映画研究会の学生も来てくれることになっていたのですが。最終的には、「やはりちょっと他の人に見てもらうものではないから」とか、「閉じられたものなので」「大々的に今は開催してませんから」というような声もあって、うまくいかなかったんです。これがコロナ禍であったからという側面ももちろんあります。人が来てくれることによる危

険があったので。ただ、守弘さんのお話を聞いていて思ったのは、来年はもっとオープンに地蔵盆がリスタートしたとして、けれどもそこに学生なり、私達みたいな研究者が入っていくのには、何かちょっとハードルがあるような……。

佐藤　先ほど質問された師先生からのコメントです。

数はわかりませんが、地蔵盆のお手伝いをしている大学のサークルはあると思います（花園大学の児童研究会は、いつも人形劇とかをしていたと思います）。

佐藤　なので、大学生が参加する可能性というのはあるようです。閉じられているというのも、私の思い込みかもしれません。ただちょっと、地蔵盆をやっているときに入りにくいのは確かであって。

熊本　マンション住まいの方が非常に増えてきました。そして、地蔵盆を知らない、町内会もない、子供会もない、という方々がいます。夏祭りの相談会で聞いたのは、「もし体験会とかがあったら行ってみたいわ」とおっしゃっているご家族の方がいらっしゃったり。また「マンションに住んでいるので町内会の行事には不参加だが、町内の催しをもうちょっとオープンにしてくれへんか」といったお話も。やっぱりちょっと入りづらいんでしょうね。逆に、町内会長をしていた方から「子供がいない、もうほとんどお年寄りの集まりみたいになってきた」「隣のマンションにはたくさん子供いるんだけど、どうしたらいいだろう」といった話も聞かせていただきました。そのなかで、私が考えついたのは、やっぱりマンパワーです。先ほど谷本さんのお話にありましたように、プログラムを作ったり。「この町内ではこういう飾りつけをしてる」というのを、昔の人はバインダーに写真を貼って残していました。「この祠はこういうふうに飾るんや」「こういうふうに綿帽子はかけるんや」とか、写真を貼ってバインダーを作っていってたんですが、今の学生であればデジタル媒体に落とせます。地蔵盆を守るためにはもう、そういうプログラムや仕組みをお手伝いいただけるような、学生のマンパワーしかないんちゃうかなと思ったりしています。

竹内　それでは京都市行政の側からのお話を福持さんに伺いたいと思います。「京の地蔵盆」を「京都をつなぐ無形文化遺産」という制度に登録されたということですが、これはいつのお話なんでしょうか。

京都市「京都をつなぐ無形文化遺産」への登録

福持　「京都をつなぐ無形文化遺産」という制度について少しご説明差し上げます。きっかけは、ユネスコ無形文化遺産に「和食」が登録されたことでした。それにあわせて、京都でもそれに呼応して盛り上げようという意味もありました。京都府の文化財保護課では、和食のユネスコ無形文化遺産登録にあわせて、無形文化財の保持者を一名認定するということで対応されました。では、京都市ではどうするか。保持者認定とはまた違うやり方でいこうとなりました。ご家庭で食べられている日常的なお料理も含めて「京」の料理という形で考えようということで、「京の食文化」という名前で守ろうとなりました。文化財として指定しますと、壊れたら修理をするとか、そういったことのために補助金を出します。補助金を受ける対象が誰なのかということを、文化財指定・登録のときには決める必要があるのですが、「京の食文化」については市民全員が保持者であるということから補助金は出さないというルールになりました。そうすると、従来の文化財保護法や京都市文化財保護条例に基づく指定や登録の仕組みとは違う仕組みをつくらないといけないので、新たに「京都をつなぐ無形文化遺産」という制度を平成二五年につくりました。何をするかというと、「こういうものが京の食文化ですよ」という典型例を調査し、京都市と有識者が示します。そして「これは大事だから守りましょう」ということでパンフレットを作って宣伝したり、京都市主催の体験事業を開催しながら皆さんと意識を高めていこうということでございます。「京の食文化」の選定が平成二五年一〇月でした。その次に「京・花街の文化　いまも息づく伝統技芸とおもてなし」が、平成二六年三月に選定されました。そして平成二六年一一月に選定されたのが「京の地蔵盆　地域と世代をつなぐまちの伝統行事」です。他にも、「京のきもの文化」などいろいろ選定されました。京の地蔵

盆は、三番目の選定になりまして、京都市としても非常に重要な行事だということです。

竹内　ありがとうございます。前段の話から繋ぎますと、私は大阪人なので地蔵盆をまあまあ知っていましたけれど、地蔵盆を知らない人が多いというところが、地元に根ざした方にとってはより驚かれる部分なのかなと思います。だから、今ここにおられるような鴛淵さん、熊本さんのような、当たり前に楽しんできた方は驚かれることかもしれないんですが、今の学生にとっては「地蔵さん、その辺にあるけど、あれは何？」という感じですよね。そこで、京都市が行政の制度で無形文化遺産として選定している。これを広報活動として、何か生かせないのかなとも思います。

京都市では民俗行事として認定

福持　私が京都の地蔵盆を見て近年特に思っているのは、いろいろと厳しい状況になっているということです。地蔵の祠の多くが、個人の所有地にあること。家の一角を貸してあげているというような状態です。これが今まで守られてきた理由の一つでもあるのですが、一方で、家を売る、更地にしたいという話が出てきたら、非常に難しい話になります。ですから、今まで当たり前にそこにあって、「地域のお地蔵さん」だということはみなさん思っているけれど、日常のお掃除とかは本当に限られた有志で行っているし、土地自体も誰かが敷地の一部を提供しているというような状況に対する感謝とか、その辺の共有や、共通認識が、少し忘れられてきているのかな、という気がしています。

それから、お地蔵さんとかお盆という表現が、仏教的であるということも言われます。「宗教だから駄目駄目」ということで、「夏祭り」にしようとか、そういうところもあるようです。ただ、先ほども申し上げたことにかかりますが、京都市が文化財として指定すること、あるいは「京都をつなぐ無形文化遺産」として選定をしているということは、「宗教行事ではなく民俗行事である」という認定をしているわけです。政教分離の観点は、クリアになっています。ですから、「いや私は（宗教的に）駄目なんだ」という人を無理やり誘う必要はないのですが、「これは仏教の行事だから、仏教以外の人は誘いにくいな」と思って遠慮する必要は何もないと思います。もちろん、「これは私の信仰の気持ちから地蔵盆をやっているんだ」という人もいらっしゃると思いますが、行政上は、「民俗文化財である」という整理です。

行政からの補助金支援よりも大切なこと

福持　また、少子高齢化や人口減少で継承が難しいというのはよく聞く話ですが、これは、全てのことで同じ状況です。地蔵盆以外の行事でもそうですし、伝統工芸や伝統技術、商店街の維持継承や世代交代なども、「継ぐ人がいない」ということが共通の課題だと思います。これを、「少子高齢化だから」「人口減少だから」という説明をしてしまうと、もう解決策はございません。必要だと思うことは、みなさんがんばって続けておられます。そのあたりを、心の問題として捉え直す必要があるのかなと思っています。

「地蔵盆について市に援助をしてほしい」「行政で何とかしてくれないか」という話をよく聞きます。しかし、例えば市内五〇〇〇件ある地蔵盆に平等に支援するとします。冷静に考えてみていただくと、毎年経費や修理代として一万円ずつ支給すると、それで五〇〇〇万円の予算が必要になってきます。五〇〇〇万円の予算を確保するのも大変なのですが、その五〇〇〇件の申請手続きと精査を行政が対応することにもなります。それを、おそらく一か月や二か月の間にやらないといけないと考えると、一件あたりにかけられる時間が何分なのか何秒なのか……というようなことになってきます。実際、五〇〇〇件の申請が出てきても、それが実体を伴うかどうかを把握しておく必要があるので、五〇〇〇人の住民票を扱うぐらいの規模の管理能力――つまり人口五〇〇〇人の村や町役場の住民課と同じぐらいの――がないとできないということになってくると思います。つまり数が多いので、行政としては平等な支援がむずかしいということがあります。ですから、やっぱりひとりひとりが「俺が守るんだ」「俺が続けていくんだ」とか、「一緒に頑張ろうね」と、人と人の繋がりのなかで楽しみ、負担のないような形で続けていくことが大事で

す。そういう意味で、まずは京都市職員も、地域活動として自分たちでそういう行事を守っていこうと実際に手足を動かすことが有効だと思うのです。自分にとって身近な伝統行事をまず守るということを、ひとりひとりがやっていけば、地蔵盆もそうですし、地蔵盆以外の行事も守っていけるんじゃないかなと思います。

竹内　知られていないということの問題を、援助はできないけれども市の制度がまず認定してくださっている。民俗行事として政教分離の問題をクリアにしてくださっている。ここがまず知らなかったことなのですが、大きな事だと思います。同志社大学はキリスト教の大学なのですが、別に何ら問題もないということですし、視聴者の方からコメントがあったような仏教系大学はもちろんのこと、宗教を超えて、京都という地域の民俗信仰、民俗行事であるということ。これを、もっと広報できないのかな、というようなことを投げかけさせていただきつつ、研究センターのメンバーのみなさんにもご発言いただきたいなと思います。

町内会ではない団体による地蔵盆の可能性

多田 実　熊本さんのお話のなかで、学生に参加してほしい、マンパワーが欲しいというお話があったので、自分の周りで何ができるかなと考えました。もう顧問ではなくなったのですが、以前、人力車サークルの顧問をやっていた時代がありました。同志社大学にはヒーローショー同好会もありますが、人力車サークル「人力俥友之会」もあるんです。結構これがいい感じで、大学の指示によって出張サービスもしてくれるんです。お地蔵さんと合わないかなとは思いますが、話題にはなるのかなというのがひとつ。あと、もう少し現実的なものとしまして、「同志社ローム記念館プロジェクト」というものがあります。今出川キャンパスの教員も入ってくれと言われて、私が教員へのアドバイザーのようなことをやっています。ここでは、アプリをつくっています。要はiPhoneやAndroidで動くアプリをつくり、それで社会貢献するという活動です。今日、谷本さんのお話にあった、カードを集めるというようなことも、今はデジタルスタンプだったりデジタル○○という感じで、アプリ上でできます。なので、もしよろしければアプリ開発でお手伝いできればいいですね。いわゆる「お地蔵さんラリー」として、お地蔵さんスタンプを集めていく、というような。よく鉄道会社でもそういうアプリがあります。それを旅のお供にどうでしょうか。意外とああいったものは高齢者の方もターゲットになります。そういう意味では、若い学生さんにも知ってもらえるし、なんかゲーム感覚で楽しめる。それでいて、お地蔵さんという本来の京都の伝統的なことを知れる。また、今はSDGsという世の中ですし、そういったことに興味関心のある学生・Z世代は、我々が思っている以上に多いです。そこをうまくターゲットにして、コラボするようなことができればお手伝いできるかと思います。もしよろしければご検討いただければ。

竹内　アプリの開発ですね。鴛淵さんのお話のなかにも、こういう時代なのでみんなが自由に考えることだ、という言葉がありましたが、まさにその片鱗を教えていただいたようです。

天野和夫（天野画廊）
何でもかんでも官に頼るのはおかしいと思います。民間で自然発生的に成立した行事だと思います。民間の活力こそが問題です。
子供対象の盆行事だという側面に対する考察がもっと欲しいです。

佐野明子　私はちょっと大学から離れてお話します。木津川市にある子供対象のサッカースクールでは、夏祭りなどのイベントを開催しています。それは、サッカースクールに入っている子供だけでなく、誰でも参加できます。「友達誘ってきてね」という感じで。新規顧客獲得のためにも、すごくいいことなんです。そのサッカースクールでのイベントは色々あって、夏祭りもやるし、ハロウィンパーティーもやります。グラウンドを持っているサッカーチームなので、グラウンドの上で、いろんなことができてしまう。だから、地蔵盆と、お互いに利益が合うのではないかなという気がしています。民間との

コラボももしよろしければお考えいただければ。きっとうまくいくかもしれないなと思いました。

竹内　木津川市は、京都市のど真ん中よりも、どんどん若い世代が増えているということなんでしょうか。

佐野　そうなんです。二〇二一年の総務省調査では、全国で九番目に人口増加が多い市区です。

地蔵盆のドーナツ化現象

佐藤　一つの問題は確かに、少子化とドーナツ化現象。京都市の物価が高くなって周りに人が逃げているというのはよく言われています。京都市周辺の自治体には、今すごく人口が伸びているところもあるみたいです。地蔵盆というものが、京都市の中心部からなくなって、それが周辺に伸びていくという未来も考えられるのかなという気はします。悲観的なことを言ったら、京都市には痕跡としての地蔵の祠だけが残るのかもしれない。

かなり前に聞いたのですが、確か太秦とかでは、すごく巨大な地蔵盆が行われているそうです。アパートや団地が三つか四つ、町が合同でグラウンドか何かで地蔵盆が行われていると。そういう意味で、「地蔵盆のドーナツ化」なんていうのは、起こっていくことも考えられるし、それはそれで一つの時代の変遷と考えることができるかなという気もします。

生存確認としての役割を町内会が担っている

鴛淵　広がるということと逆行するんですけど、私どもは町内会の会長を兼ねていたわけです。地蔵盆以外に、地域の運動会もあるんですけど、こういった行事は、生存確認なんです。一〇〇歳の方まで、杖ついて来ておられたんですよね。そして、その方が、暑いのに帰らない。子供たちはみんな帰っちゃうんですけどね。その方には、よっぽど面白かったようで。だから要するに、お金をかけないでも面白くすることができる。これは、ドーナツ化とは別で、町内会それぞれの工夫で、要するに楽しくすりゃ帰らない。クソ暑い中でも帰らない。それはびっくりしました。お金をかけないでも面白くする。一万円を五〇〇〇件に配ってどうのこうのというよりも、まあとにかく工夫して、それぞれがやるという段階から。それが各地に広がって、町内の盆踊りとか、あるいは夏祭りに行きゃ、それでいい。とりあえず、私はそういうふうに、まさに生存確認の場であると思っております。災害が起こったときに、「あの人、あのおばあさんはあそこにいたよ」とか。

竹内　持続可能な、地域のための場ということですね。

鴛淵　その方は、本当に年に一回出てこられるんですよ。よっぽど面白いのか何か知らないけど。面白いかどうかは、その時その時の、役員さんの工夫ですから。そういうふうに我々はやれたらなと思っています。

竹内　谷本さんのお話では健康を願う言葉が書かれた地蔵祠の隣にAEDが置いてあったりしましたけど、まさに「健康を守る」という状況になってるわけですね。

鴛淵　消防職員が来て、消化器の使い方とかを年に一回教えてもらう防災教室がありますが、幸いにも、京都市内はあまり災害がないんです。これが、逆に怖いんですよ。何かあったときに大変だなと思っています。そういうことの一環で、できるだけ町内の顔を覚える。その材料に、地蔵盆は一つの役割を果たせると私は思っております。

行事や文化財で地域の活力を

福持　今のお話に関連して、京都市でも京都大学の前田昌弘先生の研究に協力している活動もございます。前田先生は、コミュニティの「レジリエンス」、地域の強さを研究されている方なのですが、近年の研究成果で、地域のある一定の行事のなかで最も参加者が多い行事が地蔵盆なのだと示されました。町内会が主催でも、町内会に入ってない人もこの日は来ていいよという地域がちらほらあります。さらには、普段そこには住んでいない息子さんのご夫婦、外孫、そういったような人たちも呼んで、ぐっと人が集まるとのことです。そういう魅力が地域の強靭性に繋がっているのです。

私どもは文化財保護法のもとで文化財を守るということを行政の仕事としてやっているわけですが、文化財が残っていても、住民がゼロになってしまったら駄目なわけです。行事や文化財があることで、地域に活力がある。そういう状態が円満な形じゃないかなと思っています。

す。つまり、地域が永続していく、あるいは発展していくということに文化財が役に立つべきで、地蔵盆はそういう魅力があると思いますし、地域のシンボルでもあります。だから、ドーナツ化現象になって人がいなくなっても地蔵盆は続ける場合、これはこれで素敵で大事な取組です。ただ、僕らが子供の頃に過ごして楽しかったあの地蔵盆は、京都のあの町で、あそこの路地でやったという記憶が、強烈に素敵なのです。それは大人がこそ演出してあげる、動機づけをしてあげる必要があるのです。それに尽力するのは、町の将来に、すごく関係してくると思うんです。素敵な思い出を作るために。大学生が関わるのもいい話です。「大学のときに僕はあそこに四年間、地蔵盆を手伝いに行ったわ」とか「あそこ、今はどないなってるんやろな」とかいう思い出。そこに行ったグループで仲良くなって結婚するとか…。そんなことになったらもうその場所は聖地です。地蔵盆を続けることだけではなく地蔵盆を取り巻くいろんな楽しいことがあり、それでこそ続いていくんじゃないかなと思います。

竹内　非常に美しく福持さんにまとめていただきました。天野さんからもう一度コメントをいただきました。

天野和夫

矛盾の多い大人社会への仲間入りという側面があるのではないかと推察します。

町内会についてのオープンな議論を

竹内　福持さんの先ほどのお話と逆の印象ですが、しかし、持つ意味は一緒ですよね。非常に印象深い行事であり子供心に何かが残る。そういう、魅力のある行事であるということが、まずは大切であるということなのかなと思います。今、予定の時間より超過してしまっていますが、小黒さんいかがですか。

小黒　純　皆さんのディスカッションを聞いていろんなことを考えておりました。ちゃぶ台返しみたいになるかもしれないのですが、そもそも、地蔵盆や地蔵祠の管理が、町内会単位で行われてきたということですね。これ

からもその担い手でいいのか、（担い手の）多様性も考えていいのではないかなという気がしました。というのは、町内会自体の問題がさまざまにあります。そこを外してこの議論はやっぱり決着を見ないだろうと。

現代日本の自治会・町内会について、こういう巨大な調査・研究[*2]（書籍の表紙を見せながら）もあるんです。こういう研究を見ると、やっぱり自治会や町内会への参加率は全国各地で落ちています。地域によってはもう、六割とか五割とかになっています。そして補助金についてもさまざまです。例えば行政が町内会に補助金を出している自治体もあります。大津市は巨額な補助金が出ていますが、一方で関西では京都市や神戸市は補助金が出ていない。そうすると、行政と町内会の関係というのもそれぞれ違うし、それから町内会（自体の在り方）もそれぞれです。例えば鴛淵さんのところにはすごく仲の良い町内会が存在するけれども、そうじゃない町内会もいっぱいある。そこには地蔵盆があり伝統もあるというのは確かなのですが、担い手が町内会である限りは、町内会の問題を考えざるを得ないと改めて感じました。

そこがもう少し流動的になれば、佐野さんのお話のように、例えばサッカーチームが地蔵盆の担い手でもいいんじゃないか、とか。そうなっていくと、地蔵盆自体も多様化する。多様性に応じたものになっていきます。「地蔵盆をやっていいですよ」と委任や委嘱する町内会があれば、大学の方で引き取ったり、サッカーチームが引き取ったり。

それから、いろんな町内会が一緒に集まって管理することや、（外部の組織・団体に）委任して地蔵盆をやってもいいとなっていけば、いろんなアイディアが広がって、初めて、地域のそれぞれの人のものになるのではないでしょうか。

町内会や自治会の敷居が高いとか閉鎖的だと思っている方が、今はとても多いと思うんですね。よく問題になるのは、「お金がどうなってるのかわからない」ということ。「みんなの町内会になっていない」と感じている人が、特に若い人には多いんじゃないかなと思います。当然ながら、イベントにはお金がどうしてもかかる。それから、地蔵祠の維持管理でさえ何らかのお金がかかる

わけです。なので、普段ずっと町内会が維持管理しているなかで、何かのイベントのときだけ「自由に誰でも」というわけにはいかない。そういうお金の問題もどうしても発生するかなと思います。

地蔵盆や地蔵祠を市民のものにするためには、やはりそういうことをオープンに議論していかなければいけないだろうと感じました。

竹内　そうですね。今、視聴していただいている森篤さんからのコメントです。

森篤

町内会に入っていないご家庭のために、学区で地蔵盆をやられたところがコロナ禍の前にありました。その際に大学生のサークルが協力したと話を聞いたことがあります。

まとめ

竹内　最初に地蔵祠の歴史を谷本さんからお話いただきましたが、「あの形で守っていかなあかん」と思っていた地蔵祠・地蔵盆が実は明治以降につくられたということの発見はとても大きかったですね。だから、何も「伝統的」とはいえ守らなきゃいけない形が「これだ」と決まっているわけではないということですね。そしてみなさんとお話しているうちに、地蔵盆のドーナツ化現象という言葉が出てきたのが印象的でした。確かに、地蔵盆をドーナツ化させるのがひとつの生き残らせる道であるのかもしれません。さらにいくつか出た案ではデジタルを使った地蔵のスタンプラリーという新しい手法も興味深く、文化を継承するヒントとなるのではないかと感じました。また、繰り返しになりますが、鴛淵さんがおっしゃったように、新しい世代が繋いでいく方法を考えなければ未来はないということは間違いのないことです。これは、先ほど小黒さんがおっしゃったこととともやはりリンクしてくるのかなと思います。

研究分野が全く違う教員が集まった研究会に、元町内会長、地域の経営者、そして市職員の方、そして今日は発言していただく時間を取れませんでしたが、ジャーナリストの西村さんにも来ていただきました。こういう様々な立場・専門を持つ方々が集って話すことこそが、持続可能な地蔵祠・地蔵盆のために必要なのかもしれないですね。本当はここに学生もいてほしかった。次回は学生も交えて、そして地域の方も、特に町内会役員の女性にも入っていただくといいですね。地蔵盆なるものがいつ始まったかは今日教えていただけたので、今後、どういう形での継承があり得るのかを継続して考えましょう。私自身は、今日聞いたアイディアは、どれもこれも自分一人では思いもつかなかったことだったので、手前味噌ではありますがこのような会をやってよかったなと思っております。しかも、Zoomを使ったやり方で。一人ずつバラバラで参加する不思議と鴛淵さんもおっしゃっていました。この手法自体とても奇妙なのですが、この奇妙な方法で、地蔵盆なり地蔵祠なりを語るということが、逆に次に繋がるのかもしれません。そして、YouTube同時配信でしたので、また別の世界から聞いてくださってる方もおられます。コメントなどでご発言も頂けました。ありがとうございました。さらにこれは録画されているので、後ほど聞いていただく方もおられます。さらには紙媒体でも広めたいと思います。何より、知ってもらうための行動をおこす必要がある。それを私も声高に伝えていきたいと思います。

およそ二時間、不思議な会でございましたが、私の記憶にもとっても残りましたし、みなさんの記憶にも残るといいなと思います。それこそが、地蔵祠が残っていくことなのかなと思います。結論が出たわけではございませんが、今日はこんな形で閉会させていただきたいと思います。

＊2　辻中豊、ロバート・ペッカネン、山本英弘『現代日本の自治会・町内会――第1回全国調査にみる自治力・ネットワーク・ガバナンス』（木鐸社、二〇〇九）

シンポジウムを終えて

谷本 研（成安造形大学）

昨年（二〇二二年）末、私たちのシンポジウムをご覧になったという方が成安造形大学に電話をくださいました。北来町町内会の副会長をされている方で、シンポジウムの中で紹介した、私のつくった御詠歌を町内会の六三軒に配りたいというお話でした。

実は北来町でも多分に漏れず、現在、町内の子供の数が三人だけで、コロナ禍の影響もあって、地蔵盆や祠自体の存続もどうするか町内会として悩んでいる現状とのこと。祠の維持費として年間一〇万円ほど必要なのですが、二～三年地蔵盆ができていないので寄付も集めることができず、祠の「供養じまい」も含めて考えておられたのだそうです。

そんな矢先に開かれた今回のシンポジウムでは、地蔵盆や地蔵祠の存続を前向きに考えていく話の流れで、しかも、私のつくった御詠歌で「北来町」が第一番にうたわれて紹介されました。このことが、「存続すべき」という思いと、「供養じまいするしかない」という現状の間で悩んでいる町内会への問いかけの様に感じられたのだと思います。そこで、いずれにせよまずは町内の方々にお地蔵様に対して意識を向けてもらう必要があると考え、御詠歌を配ろうということになったようです。

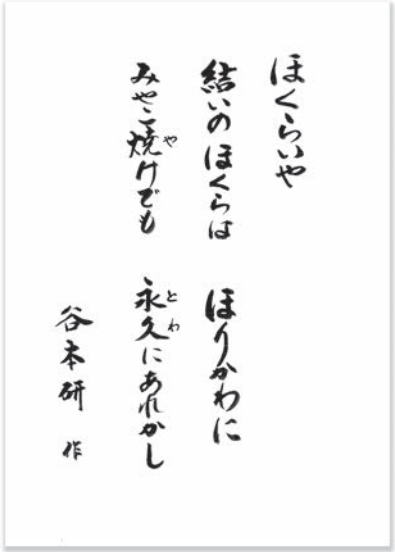
そして、ちょうどこの年末年始に、奇しくも北来町の祠があるのと同じ堀川通沿いのギャラリーで私が個展をしていましたので、町内会の役員の方々にご来場いただき、御詠歌をお渡しすることができました。

私としては、もちろん祠の存続を望み、もし自分の作った御詠歌がそのことに何らかの力を発揮できるとうれしいところですが、とはいえども地蔵盆の一番の対象である子供の数が減少する中で、祠を残すことだけが目的化するのは本意ではありません。

どういう方向になるにしても、御詠歌とシンポジウムから繋がったご縁として北来町地蔵祠の今後のあり方を取材していければと思っています。そして、今回のみなさまとの取り組みの一環としても、北来町の今後の動向は興味深い事例の一つになるのではないかと思っています。

追記：

その後北来町では、新しく町内会則を印刷して会員の皆さんに配布するにあたり、その最後のページに、私のつくった御詠歌を町内の達筆な方の書にして掲載してくださったそうです。作品として私が勝手につくったものが、こうして地元に馴染んでいくというのは、本当にうれしく幸せなことだと思います。



「北来町町内会会則　第３版（令和５年２月15日改訂）」の最終ページに掲載された御詠歌

シンポジウムを終えて

鴛淵 晋一郎（壬生東淵田町町内会元町内会長）

コロナ感染症による影響は、この三年間、京都では三大祭も神事のみ継続され、外的な行事は、ほぼ中止、ないしは縮小されていたのはご周知の通りである。この状況は約八〇年前に太平洋戦争下における状況とパターンが類似していると思える。地域の地蔵盆行事も例外ではなく、中止や縮小を余儀なくされた。問題はコロナ終息後、元のように町内に地蔵盆が戻ってくるのかどうか、ということであるが。例えれば、「コロナ後」はいかになるだろうか、ということだ。

戦中生まれである小生が経験した子供の目線からの地蔵盆の記憶を若干たどりたい。小学校低学年のころ、先ずは「夏休みバンザイ！」で遊び呆けたあと、お盆の大文字の送り火が消えると悲しくなったものである。残された夏休みの宿題の山。そこで、小休止ともなる地蔵盆行事に興ずることとなる。「児童ボン」とはよく言ったものだ。（地蔵という言葉を知らなかっただけだが）まさに子供のお祭り。そのあとは宿題を片付ける作業に追われ、より一層悲しさも増したものである。

夏の暑い盛りのこと。もともとは中断していた地蔵盆行事も、戦後、娯楽の少なかった時代に子供たちが少しでも明るく過ごせるようにと、当時の町内会の役員さん方が知恵とその労力を絞られたのであろう。空き地には舞台が設置され、そこで演芸大会が催されたこともある。その時点では、町内だけではなく、うわさを聞き付けた他の町内からの人びとも集まり、数百人の大会が開催されたわけだ。盆踊り、漫談や歌謡ショー、映画鑑賞などもされたと記憶する。また、手品師・マジシャンが手に持つ花束の芯から飛び出した傘を開くと、そこからキャンディーがあふれ出てきて、投げられたキャンディーに子供たちが群がるという構図。手品・マジックとはなんと素晴らしいものかと子供心に、目に焼き付けられたものである。甘いものが欠乏していた時代のお話しであるが。二日間にわたり催された地蔵盆では袋菓子などが、朝、昼、三時に配られ、それも楽しい思い出となった。夜には道端や空き地で花火に興じたものである。

日本の景気もやや上向きになったころには、バスツアーが組み込まれ、先ずは「東山・将軍塚一〇〇万ドルの夜景」が定番となったと記憶する。それが比叡山山頂への納涼バスツアーへと格上げされた。その後、日本の経済状況も神武景気などが到来し、バスツアーも地蔵盆行事も拡大。子供たちは琵琶湖畔の大型ヘルスセンター（当時のレジャー施設）の大プールでくたくたになるほど遊び興ずる間に、大人やご老人たちは室内の大演芸場で地方回りの歌手たちの歌声や様々なショーにひとときの娯楽を楽しんだものである。

また地蔵盆の夜は特別で、多くの子供たちは遅くまで、「ドロ・ケイ」鬼ごっこに興じていた記憶もある。また、時代の変遷に反映して、団体行動の行事の難しさ、そして危険や事故が取り沙汰されるにつれ、地蔵盆行事も次第に内向きになり、その上、少子化、高齢化も加わって、行事の規模も次第に縮小される経緯をたどったのである。その後、社会も安定期に差し掛かり、地域によっては集合住宅も増加し、町内会・自治会そのもの自体の存続までもが問題となったときく。

さて、小生は三〇代前半に、たまたま七年おきの自治会副会長に選出され、その後、五年おきの自治会・町内会長を五回ほど経たわけだが、少子化、高齢化、独居老人の増加傾向とともに、一日となった地蔵盆行事では、子供たちだけではなく、大人たちも楽しめるようにと工

夫したわけである。少子化では、子供の福引きといっても、ほぼ景品は初めから個別に決められているようなものだ。それと同時にお昼は母親方の負担を軽減しようと、マクドナルドなどの軽食も配布したことがある。それはともかく、あの猛暑のなかの行事進行では、おやつをもらうと、即、子供たちはクーラーの効いた涼しい家に立ち戻り、ゲームなどに興じる。残るは役員と組長など。これでは、夏の暑い盛りの行事が先細りになるのは時間の問題であろう。また、役員の成り手の減少には高齢化と独身者の増加も拍車をかけることとなった。

そんな状況の中でも、行事においては、まずは役員たちが「楽しかった」といえる行事を目標に努めた。役柄を苦になってはマイナスとなる。少なくとも役員が楽しいと思えば、行事に参加する人びとも楽しいはずに違いない。それには創意工夫も必要であるが。日本人が好むのは、福引きだとかビンゴゲームでも、空クジなし、つまり景品は少しでも良いから、空手で帰してはならないのが原則で、輪投げにしても、夏だからジュースや飲料に輪を直接投げ入れるというようなゲームも考案したことがある。その時、日本人的射幸心は無くなるものではなさそうだとも知った。ある大人は「ビール！　ビール！」と大声で叫んでいた。形に残らないものを景品にするのが良いだろうと思われた。つまりお腹に入れれば、その時の楽しい記憶しか残らないであろうから。

戦後、物の無い時代には日用品なども景品にされたが。地蔵盆は本来、限られた町内予算と寄付金などで成り立つものである。時代の流れと同時に、地蔵盆の規模も次第に内向きになり、元来自前のテントの構築から、飾り付けなどにおいても、貸し出しテントやテーブル・イス利用で、出来るだけ役員の負担を減らそうという傾向となる。外での行事なので天候には左右されるが、幸い小生担当時には台風などの襲来はなかった。

こんなエピソードがある。ある時、誰でも参加できるビンゴゲームと輪投げ、そして全所帯向けの恒例の福引きを同時進行したことがある。ところで、ゲートボールの主であり、かつて戦時中は自治会で活躍され高齢の女性で、普段は無表情のお方が福引きを終わられ退出されたのだ。しばらくするとまた戻って来られじっとゲームなどの成り行きに注視されていたのには役員、顔を見合せて驚いたものだ。「面白そうなので、福引き景品を自宅へ置いて、また来られたそんな例」もあった。

地蔵盆行事にはもう一つの役割りがある。それは普段お見掛けしない町内の住人の方々や、ご挨拶だけでお話しする機会も少ない方々との交流もあり、それは他の行事、消火器訓練や地元の体育祭と同様、ある種の生存安全確認の一助ともなる。幸い京都は近年、大災害には遭遇していないが、特に高齢居住者にはそれなりの配慮が必要である。それにはお顔を知っていることも大切と思われる。

そのような過去の経緯があるが、それも期せずして遭遇したコロナ時期、地蔵盆の今後のあり方も町内自治会において余儀なく見直さねばならないことに遭遇したのである。ただし相当、内向きの傾向とともに、果たして再生が可能かという問題がそれぞれの町内自治会で語られることであろう。もっとも、長野県などの道祖神信仰と同様で、現在、厳然と地蔵尊は各町内に残されており、近い将来は規模も縮小されても何らかの形で継続、存続されるのが穏当とも思えるのだが、将来に関しては未知数である。そのような曲がり角に差し掛かっている時代でもある。

シンポジウムを終えて

熊本盛行（熊本玩具社長）

Revive 地蔵盆の提案 "All KYOTO で NEW STYLE"
地蔵盆を新しい形で蘇らせる
京都をつなぐ無形文化遺産「京の地蔵盆」を未来に繋ぐ為

新型コロナウィルス感染症の影響により、「地蔵盆」だけでなく京都のほとんどの地域行事やお祭りはこの三年間、中止や縮小を余儀なくされました。　しかし、昨年末より政府による国民の行動制限が緩和されることとなり、今年からはいろんなイベントが復活していくであろうと期待しております。特に京都の町内各地で行われていた伝統行事「地蔵盆」も今年こそは開催してもらいたいものです。しかし年に一度の行事が三年連続で中止されたことにより、昔どおりに実施するにはとても困難であり多くの問題が山積みとなっております。・打ち合せ（総会）・担当者の決定・案内文・人数確認・買い物・プログラム作成・準備・設営・当日段取り等、過去の実績から引っ張り出すだけでも大変なことです。

このままでは京の地蔵盆の存続が危ぶまれると思い、二〇二二年七月にはこれに少しでもお役に立てればの思いで私ども業者数社が中心となり「地蔵盆・夏祭り相談会」をゼスト御池にて開催いたしました。これについてはシンポジウムでもお話させていただきました。この事業には我々の関係者だけでなく、京都市さまを含め多くの企業さまや団体さまの後援やご協賛、ご協力を頂くことができました。皆さま口を揃えて「良い企画だ、京都独自の伝統文化を守ってほしい」と言ってくださると共に快くご協力・ご協賛をくださいました。

この期待にお応えするよう努力するつもりではありましたが、残念ながら六月下旬頃より新型コロナの増加傾向が続いて第七波が夏休みを直撃することとなり、各町内会さまの地蔵盆の開催意欲も下がり、残念ながら前回の来場者は少なくなってしまいました。

後の熊本玩具のお客様データによると、この年に地蔵盆を実施した町内会はコロナ前の三〇％未満にしかならなかったとのことです。しかし、この相談会において京都人の気持ちを知ることができました。

そこで私たちは「地蔵盆・夏祭りの請負人」として、二〇二三年も昨年同様、「第２回 地蔵盆・夏祭り相談会」を今年は六月中旬に開催する予定です（ご町内の地蔵盆の相談時期を鑑み）。今年の目標は、地蔵盆で必要な物やその買い方を紹介するだけにとどまらず、実際に来場者が「楽しそう」「やりたい」「これならできる」とまで思ってもらえるような相談会にしていきたいと考えております。昨年の相談会で多くお聞きした町内会さまのお悩みは、準備する物や買い物といった地蔵盆に必要な「モノ」ではなく、「誰が?」「どうやって?」「何をすれば?」「どこで?」という方法「コト」が多かったと思います。この「コト」について町内会の皆さまと一緒になって考え、解決していけるような第２回の地蔵盆・夏祭り相談会にしたいと考えました。ここにその提案内容を記載いたします。

①「誰が?」

町内会の少子高齢化に伴い、この地蔵盆を実施する担当者やこれに参加する子供たちの人数も減りつつあります。このままでは、地域住民の親睦の機会や地域社会を健全に維持する機能の一部を担ってきたこの伝統行事が消滅しかねません。ＳＤＧｓ一一番目の項目「住み続け

られるまちづくり」を目標として、この課題を解決したいと思います。

そこで、京都の大学に通っている大学生たちの力を借りれないものかと考えました。私は仕事柄、いろんな場所で学生たちと接する機会があります。（アルバイトの雇用やいろんなイベント会場でのボランティア活動する学生等）その学生たちに「地蔵盆って知っている?」と尋ねると、京都府民でない方はもちろん知らない方が九割以上ですが、子供のころから京都に住んでいる学生ですら「知らない」「した経験が無い」と答える方も大半です。

せっかく京都に来ているのだからと、この地蔵盆の「コト」をお話すると大抵の学生たちは興味をもってくれました。

もし、この学生たちと一緒にSDGs目標として取り組むことができれば、大きな革命を起こすことができるのでは? そして、今年の地蔵盆・夏祭り相談会を「Revive 地蔵盆」活動として京都の学生たちが中心になり開催することが できれば、京都の無形文化遺産となった「京の地蔵盆」を持続可能にすることが可能になるのではと考えました。

②「どうやって?」「何をすれば」

地蔵盆を開催するにあたって、それぞれの町内会に様々な問題点があります。昨年の相談会で私が聞いただけでも 「人数が少なく子供もいない」「引継ぎが上手くいかない」「町内会費の問題」「マンション自治体との関係性」等、しかし、考え方次第でやり方はいくらでもあると思います。例えば、「隣接する数町内会での共同開催」や「参加者を 募ってその参加費をとる」等、行事の内容やそのやり方次第で地域住民が一つにまとまることが出来ると思います。

またSDGsの取り組みとして京都の学生ボランティアを募集することも考えられます。今回の相談会を学生たちによる「地蔵盆・夏祭りの相談会」と位置づけ、グループごとに町内会の問題点や相談事を聞いていただく。その後、各グループが問題解決案を作った上でそれぞれの町内会にフィードバックするだけでなく、担当した町会の 地蔵盆にボランティアとして参加しお手伝いをして成功することができれば、そのグループのSDGs目標達成とする。そんな活動ができないでしょうか。

・この京都の学生たちのボランティア活動を京都の企業が応援する

大小にかかわらず京都の会社経営者には「Revive 地蔵盆」の趣旨をご理解いただけるでしょう。そして学生たちの活動を応援してくださるのではないでしょうか。この活動にご協賛やご協力をいただくことが、「ALL KYOTO」、京都独特の伝統行事を新しい形で蘇らせることにつながります。もしかしたら、企業の新しい人材発掘の手段にもなるかもしれません。そのようなご協力をぜひ頂きたく思っています。

③「どこで?」

地蔵盆行事を開催する場所? これも大きな問題です。

一つの町内会でこじんまりと開催するのであれば問題ないのですが、「新しい形の地蔵盆」としてより多くの町内や自治体が参加できる行事にしていくのには、より広い場所が必要となります。幸いにも京都には神社仏閣が多数点在しております。これらの一区間を年に一～二日間お借りすることができれば、地域の住民が集える最適な場所になることは間違いありません。神社さまやお寺さまにとっても、地域住民との親睦を深めるきっかけになるのではと勝手ながら考えております。無形文化遺産でもある「京の地蔵盆」は宗教と関係ない伝統行事です。これをご寺社仏閣の皆様にも理解いただき「ALL KYOTO」としてご協力いただきたいと思います。

①～③の内容で第2回「地蔵盆・夏祭りの相談会」を実施しようとするならば、学生たちへのボランティア募集や企業さまや神社仏閣さまへのご支援やご協力のお願いを早々にしていかなければなりません。京都市、ゼスト御池地下街の皆さまにはすでに共催のご意向をいただいていると共に、中小企業家同友会や同志社大学ボランティアサークル アスビット等の皆さまにもご協力いただけることになっておりますが、より多くのかたにこのような活動を知っていただきたいと考えております。

以上、シンポジウム「地蔵祠・地蔵盆は今」を引き継ぐものとして、こちらに提案を記載させていただきました。より多くの皆さまに関心を持っていただき、ご支援とご協力いただけましたら幸いです。

「地蔵盆・夏祭り請負人」実行委員長　熊本盛行

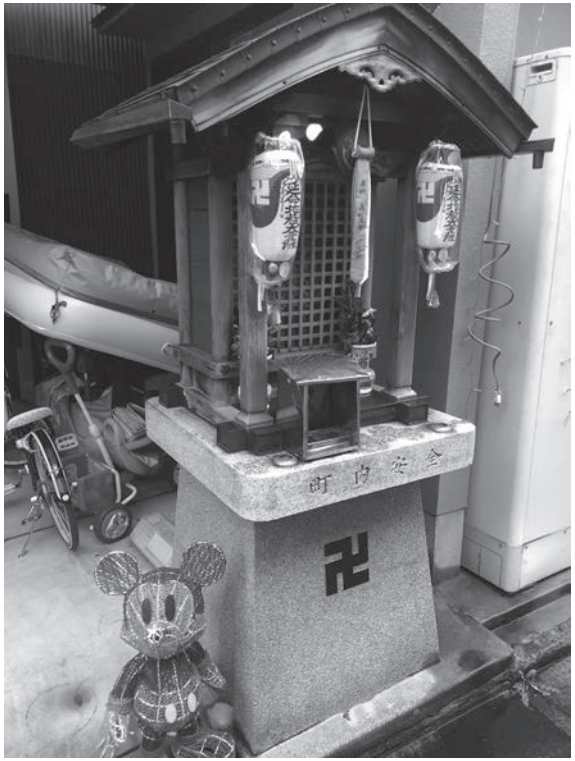
ご意見、ご支援、地蔵盆開催にお困りの町内会さまのお問い合わせはこちらにお願いいたします。

電話　075―841―8625（熊本玩具）

「京の地蔵盆」特設ページ

https://www.kumagan.co.jp/zizobonev1

論考・エッセイ



コロナ禍による京都市下京区「前田東町」の地蔵盆の変容

樋口摩彌

はじめに

本稿は、地蔵信仰関連する近世期の都市形成史の視点を取り入れて、現代の京都の町内で執り行われる地蔵盆の風景にコロナ禍が与えた影響を考察するものである。

第1章では論考の前提として、地蔵信仰についてまとめる。第2章では、近世期の京都の都市形成の風景である両側町の誕生と地蔵信仰の関わりを述べる。第3章と第4章では、京都市下京区にある「前田東町」の町内会の運営から、コロナ禍前後の地蔵盆の風景を描く。

第1章　地蔵信仰の風景

日本国内の各地には「地蔵尊」が祀られており、人々は「お地蔵さん」に手を合わ

せる風習がある。この地蔵信仰は、日本に古くから定着した信仰、風習である。『新纂浄土宗大辞典』の「地蔵信仰」の項は、「地蔵菩薩に対する信仰。（中略）庶民の間でも篤く信仰されるようになる。そこでは、地蔵は弱者を救うとする信仰から、子どもの守護者の性格が付加され、子安地蔵の信仰に結びついてゆく。また地蔵は道祖神信仰とも習合し、現世と他界の境界を守護する塞さいの神としての性格も帯びるようになる」とある。[*1]

また仏教説話の「賽の河原」は有名である。三途の川の手前にある賽の河原で、親よりも早く死んだ幼い子供達が石を積み上げている。しかしその積み上げた石は、鬼に蹴飛ばされ、子どもたちは一日中石を積み上げ続けなければならない。その子どもたちを救済するのが、地蔵菩薩である。

こうして地蔵菩薩は子どもたちを守護する象徴として語られている。また賽の河原を舞台とするように、地蔵菩薩は現世と他界の間に位置する仏像として認識されてきた。

第2章　京都の都市と地蔵信仰

この地蔵信仰は、京都の都市形成と深く関係している。京都市内中心部は両側町という自治会が形成されている[*2]【図1】。

近世期、この「両側町」は京都の都市の統治システムとして完成した。京都洛中の

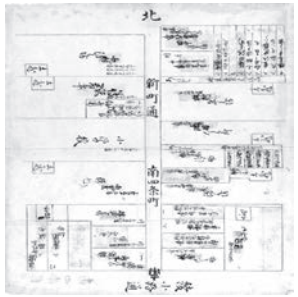


図1　両側町である南四条町（歴彩館所蔵）

安全に直結する治安の維持や衛生管理、火災を起こさないことなどは、各町の責任であった。とくに夜の治安の維持また衛生管理は、重大事項であった。例えば、町内ではない人物が、何らかの事情によって町内で死亡した場合、その衛生管理を含む死体処理は、この町内の仕事となる。これは町内にとって予定外の負担となる。こうした事態を回避したい各町内は、夜間の衛生管理、治安維持のために、日が暮れると各町の境にある木戸を閉じ、部外者の侵入を防いだ。その木戸あたりには祠（ほこら）とともに、地蔵菩薩が祀られた。これはあの世とこの世の境の賽の河原で地蔵信仰が機能したように、各町の境の木戸には、地蔵尊が祀られた。こうして町内の形成に、地蔵菩薩による地蔵信仰が見て取れる。

第3章　「前田東町」の地蔵盆の運営

この各町内にある地蔵菩薩は、明治期、子どもの守護者としての役割を強め、地蔵盆としての役割を強めた。前述の『新纂浄土宗大辞典』には、「明治以降には、特に京都を中心に地蔵信仰が盆行事と結びつき、子どもを主体とする地蔵盆の行事として定着する。それはやがて関西周辺の広い地域へと普及してゆくことになる」とある。明治初年、町内にあった地蔵菩薩は、明治政府が推し進めた廃仏毀釈によって廃棄、撤去された。しかし明治中期には町内に地蔵菩薩の姿が戻り始める。やがて各町内では、お盆の後の土日に、町内の路地や空き地などにゴザが敷かれてテントが張られ、

地蔵盆が開催されるようになった。

ここからの論考は、京都市下京区の町である「前田東町」のコロナ禍の前後で、地蔵盆がどのように変化したかを明らかにする。筆者の実家が位置する京都市下京区「前田東町」は、五条通と櫛笥通の交差点を南に入った、西側に位置する町内である。五条通は全八車線の大通り、櫛笥通は北行一方通行の細い通りである。近世期、「洛中」と「洛外」の南の境の通は松原通であった。五条通りは松原通から二筋南に位置しており、近世期においてはいわゆる「洛外」であった地域である。よって櫛笥通の西側のみが前田東町であるように、近世期の洛中で完成したような、通りを挟んだ両側を町として形成した町内ではない。

町内の規模をみると、二〇二一年（令和三年）の町内の世帯は四五世帯で町内会員世帯は四三軒で会員数は九六％である。京都市による調査、推定をみると、[*3]下京区の町内会加入率は七二％であるので、前田東町の加入率はかなり高い。前田東町の町内の年会費は三六〇〇円である。なおこの年会費は各町で異なり、例えば祇園祭の鉾がある京都市内の「田の字」地区の町内では、年会費が一万円を越える町内もある。

町内の役員は、「相談役」「会長」「副会長（二名）」「体育振興委員」「少年補導委員」「保健衛生委員」「防火防災委員」「社会福祉委員」「女性班班長」がある。年間の町内の様々な業務にあたるのは、「三役」と呼ばれる「会長」「副会長（二名）」である。

「体育振興委員」は、複数の町内が出場して開催される学区（前田東町は光徳学区）の

運動会の世話役を担当する。ただし、平成二一年度には、町内会の高齢化もあり、運動会は不参加となっている。「保健衛生委員」「防火防災委員」は近世期に成熟した両側町の役割を踏襲している。また町内は六組に分けられ、毎月、古紙回収や地蔵尊の掃除を担当している。

第4章　地蔵盆のコロナ禍前後の比較

では地蔵盆はどのように運営されていたか。「前田東町内会会則」［地蔵尊祭り］「第10条」によると、「①地蔵尊祭りは、信者のお供金によってのみで運営する。②地蔵尊祭りは、その時の都合によって、従来のお祭り2日制を1日制にすることも有り得る。」とある。

まず、コロナ禍以前である二〇一〇年（平成二二年）に実施された地蔵盆の様子を、各家庭に配布された「平成22年度事業計画（案）」、「地蔵盆のご案内」の資料に基づき【図2】、適宜筆者の記憶（筆者は当時満二四歳）で補完して、以下にまとめる。

二〇一〇年（平成二二年）、地蔵盆は八月二三日の日曜日に実施された。前日の八月二二日土曜日には、前夜祭が行われた。前田東町の地蔵盆は、町内の地蔵尊がある路地の一部広くなっている場所が、地蔵盆が開催される場所である【図3】。

二〇一〇年（平成二二年）の中学生以下の子どもの人数は一二名である。「平成22年度事業計画（案）」の「7．地蔵盆について」によると、「庵主（あんじゅ）さんのお参りと、子供会とします」とあり、地蔵信仰とこどもが主役の会が合体したお祭りであることがみてとれる。

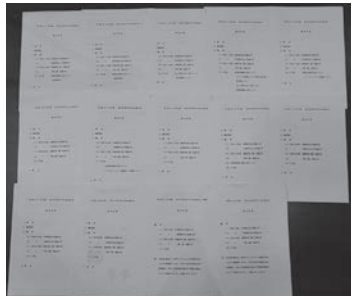
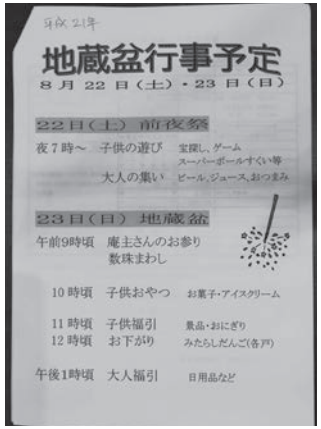


図2　2010年から2021年までの前田東町の議事録（前田東町所持）

さて、「地蔵盆のご案内」の「地蔵盆行事予定」、および筆者の記憶に基づき、当時の風景を描く【図4】。前夜祭が執り行われる八月二二日、昼食がすぎた一五時頃、町内の夫婦が一〇組ほど集まってくる。そして男性が中心となり、町内の倉庫に収納されているパイプテントを組み建てられた。またロウソクが立てられる高さ三〇センチメートル程度の直方体の木の骨組みに、子どもたちが絵を描いた半紙を糊付けした行灯が、各世帯に配られる。この行灯は各家庭の玄関先に配布され、町内は年に一度の地蔵盆の光景になる。行灯にはロウソクが立てることができるが、火災を防ぐために、実際に火を点けている世帯はほとんどなかった。

夕方、一旦路地は静かになるが、

図3　前田東町の地蔵盆が行われる路地（筆者撮影）



平成21年

地蔵盆行事予定

8月22日（土）・23日（日）

22日（土）前夜祭

夜7時～　子供の遊び　宝探し、ゲーム　スーパーボールすくい等

大人の集い　ビール、ジュース、おつまみ

23日（日）地蔵盆

午前9時頃　庵主さんのお参り　数珠まわし

10時頃　子供おやつ　お菓子・アイスクリーム

11時頃　子供福引　景品・おにぎり

12時頃　お下がり　みたらしだんご（各戸）

午後1時頃　大人福引　日用品など

図4　2010年の前田町東の地蔵盆の案内（前田東町所持）

一八時ころから準備のためにまた人が集まり始める。路地のテントの下にはゴザがひかれ、「子どもの遊び」のための輪投げやスーパーボールすくいのための水を張ったビニルプールや、「大人の集い」のためのビールやジュース、おつまみが準備された。そして一九時頃から子どもたちが遊ぶ横で、大人たちの宴会が行われる。二一時頃には子どもたちは帰り、二二時頃には大人の宴会も終わった。これで前日の前夜祭が終了である。なお「前田東町」から徒歩圏内の別の町内でも、同日に地蔵盆が開催されている事が多く、町内周辺はにぎやかな夜である。

翌日の地蔵盆当日、午前八時頃、朝食など朝の支度を終えた各家庭の女性や子どもが集まり始める。子どもたちは、町内を走り回ったり、各家からおもちゃを持ち寄ったりして遊ぶ。なお、櫛笥通はときおり一般車両が通過する。路地から急に飛び出す子どもと車両の接触事故などが起こらないように、常に大人たちが子どもたちから目を離さないようにしている。子どもたちは、親以外の大人に叱られることもある。

午前九時頃に、櫛笥通りの東側の寺院である清聚院から庵主が訪れ、地蔵尊に読経が行われる。その後、数珠まわしを行う。

午前一〇時頃に、子どもにおやつが配られ、みんなで食べる。

午前一一時頃に、子どもたちの福引が行われる。なおこの景品は、地蔵盆の一週間ほど前に、町内の三役が事前に子どもたちの親に希望のおもちゃを尋ねておき、それらを町内から車で一五分ほどの玩具屋に買いに行く。なおこの玩具屋も現在は閉店した。

午前一二時頃には、地蔵尊のお下がりのみたらし団子が各世帯に配布される。

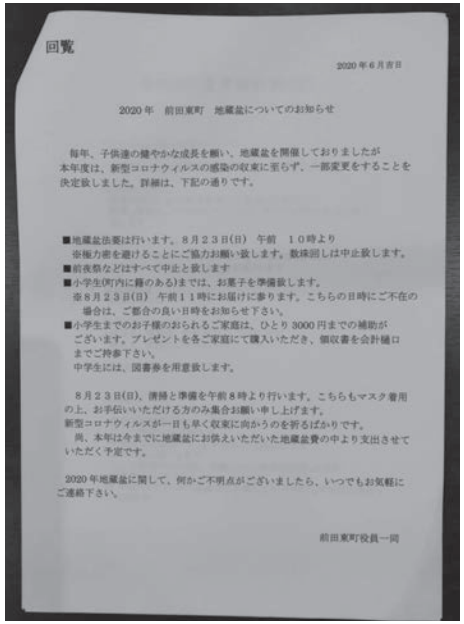
そして午後一時頃、大人の福引が行われ、米や洗剤、近所のスーパーマーケットの商品券が配られる。

そしてそれが終わるとすぐにパイプテントは解体され、町内の路地は普段の日常に戻る。

また、「平成21年度地蔵会決算報告書」によると、「お供え金」による収入が一六万七〇〇〇円。支出小計が一五万九七三八円で、前述した「前田東町内会会則」「①地蔵尊祭りは、信者のお供金によってのみで運営する。」と符合する。

支出からさらに細かく見てみると、清聚院の庵主へのお布施が五〇〇〇円、お供花が四〇〇〇円と、地蔵信仰に関わる支出が九〇〇〇円であった。

子どもの前夜祭用ゲームに二八九八円、子ども用の福引の玩具に二万七二一〇円、子どものおやつや昼食代に六九一二円。子ども関連への支出を合計すると。三万七〇二〇円であった。他、各世帯への福引に七万六三二四円、大人の前夜祭の飲食費は三万一九六〇



回覧

2020年6月吉日

2020年　前田東町　地蔵盆についてのお知らせ

毎年、子供達の健やかな成長を願い、地蔵盆を開催しておりましたが本年度は、新型コロナウィルスの感染の収束に至らず、一部変更をすることを決定致しました。詳細は、下記の通りです。

■地蔵盆法要は行います。８月２３日(日)　午前　１０時より
※極力密を避けることにご協力お願い致します。数珠回しは中止致します。
■前夜祭などはすべて中止と致します
■小学生(町内に籍のある)までは、お墓子を準備致します。
※８月２３日(日)　午前１１時にお届けに参ります。こちらの日時にご不在の場合は、ご都合の良い日時をお知らせ下さい。
■小学生までのお子様のおられるご家庭は、ひとり3000円までの補助がございます。プレゼントを各ご家庭にて購入いただき、領収書を会計樋口までご持参下さい。
中学生には、図書券を用意致します。

８月２３日(日)、清掃と準備を午前８時より行います。こちらもマスク着用の上、お手伝いいただける方のみ集合お願い申し上げます。
新型コロナウィルスが一日も早く収束に向かうのを祈るばかりです。
尚、本年は今までに地蔵盆にお供えいただいた地蔵盆費の中より支出させていただく予定です。

2020年地蔵盆に関して、何かご不明点がございましたら、いつでもお気軽にご連絡下さい。

前田東町役員一同

図5
2020年コロナ禍による地蔵盆縮小の告知
（前田東町所持）

円であったが、寄付されたビール券二〇枚を支払い、現金の支払額は一万四一二〇円であった。

このように「平成21年度地蔵会決算報告書」全体を概観すると、子どもに関連する支出の項目が多いこと、また全体の支出の二三％を締めていることがみてとれ、地蔵盆は子どもを主役とした行事であることが伺える。

さて続いて二〇二〇年度（令和二年度）の前田東町の地蔵盆の様子をみてみる。

この年度から、コロナ対策として地蔵盆は大幅に縮小された。

まず二〇二〇年六月、「２０２０年　前田東町　地蔵盆についてのお知らせ」が町内に告知された【図5】。それによると、①地蔵盆法要は実施、②前夜祭などはすべて中止、③小学生まではお菓子を準備（ただし、町内に籍がある児童に限る。三役が各家庭に配布する）、④福引を中止してプレゼントとする、⑤小学生以下の子どもがいる家庭には一人三〇〇〇円までの補助がでるので、各家庭に購入の後、領収書を三役までに持参、⑥中学生には図書券を配布、とある。事実、「令和２年度前田東町内会行事報告」によると、「８月・新型コロナウイルス感染予防のため、お菓子とプレゼントの配布、清聚院住職によるお参りの実施　＊プレゼントに関しては、本年度は町籍のあるお子様のみとさせていただきました」「その他　本年度は、新型コロナウイルス感染予防・自粛のために、当初予定しておりました行事の殆どの変更を余儀なくされました」とある。また「令和２年度決算報告書」にも、地蔵会に関する支出は記録されず、地蔵盆を代表する町内の行事はほとんど執り行わなくなった。

まとめ

京都の町の様子は、コロナ禍以前から、どんどん様変わりしていることが指摘されてきた。具体的には、ホテルの建設、高齢化によって増加する空き家、その空き家が中国国籍の経営者によってゲストハウスになったりしていることである。

こうした中、コロナ禍の影響をうけ、京都の夏の風物詩である地蔵盆の行事は縮小しつつある。地蔵盆の前夜祭、そして地蔵盆は、町内会の親交の場であった。この親交の場がなくなることは、町内会の関係が希薄になることを意味している。

ではコロナ禍が収束すれば、この解決するか、というとそうではない。コロナ禍によって町内の行事が縮小したことに対して、「仕事が減った」「楽になった」という声も聞く。こうした中、コロナ禍が収束した後、数年にわたり中断されていた地蔵盆が再開されるかは疑問である。

京都の町内会が形成してきた「子どもたちを地域で育てる」風景、門掃きで表される京都のコミュニティは、こうした町内行事が培ってきた文化である。町内行事の継続は負担な面もあるだろうが、コミュニティーとしての価値は大きい。コロナ禍が収束した後、コロナ禍以前よりも良好なコミュニティーが形成されることを見守りたい。

1 『新纂浄土宗大辞典』「地蔵信仰」の項目。（浄土宗、二〇一六年三月）

2 樋口摩彌「明治初年における「新聞」受容の風景：『京都府布令書』を手がかりに」『メディア史研究』36号（二〇一四）

3 「令和3年度 自治会・町内会アンケート 報告書 京都市」https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/cmsfiles/contents/0000300/300511/houkokusyo.pdf（二〇二三年二月一日閲覧）

樋口摩彌（ひぐち・まや）
同志社大学、立命館大学、佛教大学、四天王寺大学非常勤講師。
二〇一六年同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻博士後期課程満期大学、二〇一七年メディア学博士（同志社大学）取得。専門はメディア史、博士論文の題目は「明治前期の京都における新聞発行史に関する研究」。近世後期や明治初期の古文書などの一次史料に基づくマスメディア論、近世史、近代史、都市論の視点を用い、また生まれも育ちも京都という「地元の京都人の感覚」を生かして学際的な研究を実施している。

地蔵祠――路傍の建築

佐藤守弘

路傍の祠を〈建築〉として考えてみたい。「として」とわざわざ書くのは、それらが普通は建築物とは見なされていないからである。そもそも〈建築〉とは何かという大問題は、これまでさまざまな建築家や歴史家や理論家や批評家が真摯に考え、論じてきたことである。特に、「建築（architecture）」という概念が発祥したヨーロッパでは、それは総合芸術として伝統的にさまざまな芸術の最上位――「諸芸術の母」――とされてきた。となれば、街の路傍のあちこちにある石の地蔵を祀った祠のようなありふれてとるに足らないモノが、偉大な人間精神の精華とされる大芸術の系譜に並べられる訳もないだろう。

では、もう少し卑近なレヴェルで日本の法律を見てみよう。「建築基準法」の第二条の一は、建築物とは「土地に定着する工作物のうち、屋根及び柱若しくは壁を有するもの」であると述べている。ここから読み取れるのは、「土地に定着する工作物」の特殊な形態として「建築物」が定義されていることだろう。では、路傍祠は工作物か建築物か。法律に関しては完全な門外漢である私が建築基準法を読むだけでは、それは分からない。ウェブを検索してみてもなかなか分からない。[*1] なんといってもそこに人間が住むことはないのだから、おそらくは建築物ではないだろう。ただし同じように人間がその中では活動しない犬小屋であっても、規模や構造によっては建築物となるという意見もあるので、[*2] 祠も建築物と見なされる可能性はある。どちらにせよ、本稿では、法律の言う「屋根及び柱若しくは壁を有する」という文言を盾にとって、路傍祠、とくに京都の街なかに点在する地蔵祠を、建築として見ていきたいと思う。

ではそこに住むのは誰かというと、石造りの地蔵尊以外にはない。地蔵祠とは、人間ではなく、聖なる者の住まう構造物という意味ではじめて建築と考えることができるだろう。本稿では、地蔵祠の建築を、それを構成する要素ごとにできる限り丁寧に見ていくことで、聖なる者の小さな住まいを読み解いていきたいと思う。

まず標準的な祠を見てみよう【図1】。「標準的」というには、あまりにも立派すぎるかもしれないが、建築的な諸要素が分かりやすいのでこれを選んだ。四条烏丸近くの京都市中京区元法

図1
京都市中京区錦小路通東洞院東入ル元法然寺町の地蔵祠、著者撮影

然寺町にあるこの延命地蔵大菩薩の祠は、大きく分けると三つの要素からなっている——すなわち上屋（うわや）、基部、そして祠本体である。「上屋」——と仮に名付けよう——は、祠全体を覆う構造物である。必ずしも祠本体と同じ時期に建てられたものではなく、祠を保護し、劣化を防ぐために、むしろ後に建てられた場合も多いと考えられる。路傍の祠で、まず目に入ってくるのはこれである。基部は木材、石、モルタルなどで製作され、祠本体を支え、人間の眼の高さに嵩上げする機能を持つ。そしてその上に乗っているのが祠の本体で、厳密に言えば、これのみを祠というのだろう。祠本体は、ほとんどの場合は木造で、ファサードは多くの場合格子をはめられ、中に収められている石仏を垣間見ることができる。

上屋

この祠の上屋は立派な木造建築で、金属板で覆われた切妻屋根を有している。私が見てきた限りでは切妻屋根が多いように思えるが、同じ切妻でもこの祠のような妻入だけではなく、平入も確認できるし、入母屋造もある。また後に見るような唐破風の祠は多く見られる——寺院建築の影響であろう。この屋根の上には、シンプルな形状であるが棟瓦と鬼瓦も乗せられているので、もともとは瓦葺であったのかもしれない。さらに観音開きの金属製の門扉がつけられているが、これは形状からサイズに合う既製品を近年に取りつけたのであろう。この立派な祠をなんとしても護ろうという

土地の所有者、あるいは町内の強い意志を感じられる。照明のために電灯も付けられ、向かって左を見るとそれ用の電線が背後のビルから引かれているのも観察できる。よく見ると向かって右側の内壁にフックが取り付けられ、掃除用の箒がぶら下げられているのも見える。

とはいえ、このような立派な上屋だけではない。もっと簡素なものもある。堀川御池にほど近いこの祠【図2】は、基部に金属製の柵を直接取り付け、透明な樹脂製の波板を屋根、および周囲に張って保護している。祠が敷地ぎりぎりに建っているので、独立した上屋を建てることができなかったのだろう。元法然寺町の手の込んだ木造上屋と比べるとありあわせの建材で作ったように思える。とはいえ、現代風の手に入りやすい建材を使っているからと言っても、祠を護って後世に伝えていこうという意志が弱いわけではないだろう。それが読み取れるのが、道路側に向かって柵が途中から張り出している様子である。よく観察すると入母屋造の祠の屋根が公道に少し掛かっているのが分かるが、その屋根を削ることなく保護するために——それでいて法律に触れないように——途中から張り出させたという細かい配慮が読み取れる。それに気づくと、一見簡素に見えた上屋が、脇にある町内安

図2
京都市中京区御池通岩上西入ル三坊猪熊町北組の地蔵祠、著者撮影

全の灯籠の古い石造りとは好対照なコンクリート打放しでまるでモダニズム建築のようにも見える基部と相まって、ある種の機能美が感じ取れるかもしれない。

上屋は、必ずしも独立している訳ではない。その土地の建物の一部が上屋の役目を果たすこともある。同志社大学近くの上京区築山北半町にある祠【図3】は、近年建てられた住宅の一部に、まるでビルト＝インのような状態で安置されている。敷地いっぱいに住宅を建てたいという気持ちと祠を遺さなければならないという意志を両立させた結果かもしれない。住宅の外壁にアルコーヴを作り、きちんと雨除けの屋根も張り出させて祠を護っている。住宅が地蔵祠を取り込んだというより、祠が本体でそれに住宅が付随していると考えてみたら楽しい。

基部

元法然寺町の祠【図1】に戻ろう。この祠の基部は、上屋や祠本体に負けないような立派な石造りである。前部に張り出した部分には、香炉が設えられている。それを支えるのは、下部が二つに別れた石彫で、雲型の凝った彫刻がなされている。この図版では門扉に隠されているが[*3]、香炉の真下には、地蔵祠につきものの卍字と法輪が二つながら浅浮き彫りで彫刻されている。手練の石工によって丁寧に作られた作品であろう。

この祠の基部は石造りであるが、基部の材料も上屋と同じく幅が広い。とはいえ、

見てきた限りでは成形のし易さからか、モルタル製が多いようである——モルタルに覆われた基礎は煉瓦などの場合もあるようだ。二条城の南、中京区最上町の祠【図4】は、私たちが「タイルホコラ」と呼んでいるタイプで、基部も上屋も、おそらくモルタルで作られ、その上にピンク、水色、黒と色とりどりの凝った意匠のタイルが貼られている（モノクロ図版なので分かりにくいが）。さらに上屋の屋根は、エキゾティックな唐破風に仕立て上げられ、その下の梁の部分には、タイルを切って飾りをつけるという細かい細工が施されている。同じ建築でも、元法然寺町の祠のような木製の場合は大工が製作したのだろうが、モルタル製の場合は左官業の領域であろう。かつては街のあちこちにいた左官業者がすべてを請け負い、おそらくは手持ちのタイルを組

図3
京都市上京区室町通今出川上ル築山北半町の地蔵祠、著者撮影

図4
中京区猪熊通御池上ル最上町の地蔵祠、著者撮影

み合わせて作り上げたのではないかと想像される。[*4]

近代的なタイルと古来より続く地蔵信仰の組み合わせは、一見奇異に見えるかもしれない。しかし、そのように異質と思われるものが出会う場がヴァナキュラー（vernacular）と言われる領域である。ヴァナキュラーとは、本来、たとえば中世ヨーロッパにおけるラテン語のような普遍的な言語に対して、地方地方で話されていた言葉――のちに英語、フランス語、ドイツ語などになっていく――のことを指していた。そのことから、それぞれの土地に固有のもの、アマチュアや素人、小規模の業者によって作られるもの、市場経済の外で動くものなどがヴァナキュラーと言われ、建築や写真の批評言語として二〇世紀の終わり頃から使われるようになった。このテクストのはじめに、「ありふれてとるに足らない」という言葉に「ヴァナキュラー」というルビを振ったのは、路傍祠というものこそ、ヴァナキュラー建築と言えるのではないかと考えているからである。

祠の外装にタイルが導入された理由は、おそらくその手入れのし易さからであったのだろう。敷瓦などのよく似た先行例はあるにせよ、タイルとは西洋から近代日本に取り入れられた物質文化である――なお二〇二二年は「タイル」という名称に統一された一〇〇周年であった。[*5] タイルが日本の生活に取り入れられていったはじめは、その釉薬が掛けられたつるつるとした表面が耐水性に優れ、汚れを落としやすいからであり、屋外にあって汚れやすい祠の表面を保護するのに最適であると考えられたのであろう。しかし、そのつるつるの表面は、実用性にとどまらず、人間の知覚に訴える独特の美的な質をも具えていたのである。極めて人工的なタイルを、たとえば谷崎潤一郎は、「ケバケバしい」[*6]と非難したが、京都の街の人びとは聖なる祠にそれを貼り、派手に装わせた――ここにある種の美を見出したのに違いない。伝統と近代の不思議な出会いが生みだした奇妙な美のかたちを見出すことが、地蔵祠を見て歩く楽しみのひとつであろう。

祠

最後に見てみたいのが、基部に乗せられ、上屋に護られた祠の本体である。元法然寺町の祠でまず目を惹くのは、丁寧な柿葺（こけら）きの屋根である【図5】。よく見ると柿板が五層に重ねられている本格的なものであることが分かる。これこそ、祠が地蔵を住人とする建築と言いたくなることが理解していただける事例だと思う。中央部の扁額には、「地蔵尊」「大日尊」と仏の名号が書かれている――それぞれ下部の卍字と法輪と対応しているのだろう。一口に「地蔵祠」と呼ぶが、実のところさまざまな仏に擬せられていて、その多くは地蔵菩薩と大日如来に大別される。しか

図5
京都市中京区錦小路通東洞院東入ル元法然寺町の地蔵祠の屋根部分、著者撮影

し、この祠のように両方同時に祀っているケースも見られる。ただし真新しい提灯には「延命地蔵大菩薩」と書かれているので、これを祀り拝む人びとの仏に対する認識がどこかの時点で変わったことを示すのかもしれない。

京都の多くの町内と同じく、この地蔵祠が町の人びとに大切にされていることは、花瓶に花が活けられ、コップに水が供えられていることから分かる。定期的に花や水は入れ替えられ、先述の箒で綺麗に掃き清められているのだろう。この祠は、間違いなく生きているのである。そして格子の奥には本尊たる石仏が安置されている――本稿の主旨から言うと「住んでいる」と言った方がいいだろうか。豪勢な裂地に隠されてよくは確認できないが、おそらくは二尊祀られているようである。そうした石仏たちにとって、祠とはどういうものなのだろうか。

京都の地蔵および地蔵盆の歴史を丹念に探った村上紀夫は、おそらくは中世に制作されたと思われる石仏が、近世になって工事や井戸掘りなどによって地中から多く発見されたということを数多くの史料に見出している。当時は地中というものは一種の他界と考えられていたという説から彼が推測するのは、「地」に「蔵（おさ）」められていた石造物は、たとえそれが石仏でなくとも霊験あらたかな「地蔵」と見なされたのではないかということである。したがって、たとえば五輪塔のようなものが、赤い前掛けをかけて石仏とともに「地蔵尊」として祀られている不思議な光景もそれで説明がつくのではないかと彼は言う[*7]――たとえば岩倉上蔵町の目無地蔵尊の脇には、石仏に

混じって前掛けをまとった一石五輪を見ることができる【図6】。地下から掘り出された石造物は、前掛けという石地蔵と関連する換喩的な記号をまとうことで、地蔵尊となる。祠も同じ機能を果たすだろう。祠という建築に安置される――住む――ことによってはじめて、石は地蔵になるのである。そのように考えると、祠とはその中に安置された石という物質に聖性を与える装置であると考えることも可能ではないだろうか。

本稿では、地蔵祠を〈建築〉として見てみた。とはいえ、私はあくまでも写真を中心とするメディアとそれを取り巻く視覚／物質文化の研究者であるので、どこまでその目的が達成できたかどうかは、はなはだ心もとない。だから、このテーマは、ぜひ建築の専門家に取り組んでもらいたいと思っている。本稿では地蔵が住まう祠の建築様式の、いくつかのヴァリエーションを紹介してきたが、この紙幅では紹介しきれない、さまざまなスタイルの祠が存在することは言うまでもない。こうした路傍の小さな建築物がどのような歴史をたどってきたのか、どのような様式の広がりが認められるのか、地域社会においてどのような機能を果たしてきて／いるのか。問いたいことは、数限りなくある。

図6
京都市左京区岩倉上蔵町の目無地蔵尊脇石仏群、
著者撮影

1 ただし、国税庁のウェブサイトでは、「庭内神し〔祠〕」の定義が以下のように述べられている。「「庭内神し」とは、一般に、屋敷内にある神の社や祠等といったご神体を祀り日常礼拝の用に供しているものをいい、ご神体とは不動尊、地蔵尊、道祖神、庚申塔、稲荷等で特定の者又は地域住民等の信仰の対象とされているものをいいます」。ここでは「庭内」とあるが、庭にあるものだけではなく、公道に面しているものも含まれているようなので、地蔵祠はこのカテゴリーに含まれると考えていいのではないか。国税庁「庭内神しの敷地等」、https://www.nta.go.jp/law/shitsugi/sozoku/04/02.htm、二〇一三年一月三一日アクセス。

2 平野ゆかり「ひそかなブーム！「小屋」を建てる際の注意点。建築確認は？ 固定資産税は？」、『All About News』、二〇一五年一〇月二九日、https://news.allabout.co.jp/articles/d/89149/、二〇一三年一月三一日アクセス。

3 Google Map には、この祠がマークされていて、そこには門扉が開けられている状態を含めて複数の写真がアップロードされている。Google Map「元法然寺町地蔵尊大日尊」、https://goo.gl/maps/ZWJiUkB1PQYdzzUk6、二〇一三年一月三一日アクセス。なお、本稿では、Google Map の表記に従い「元法然寺町」としているが、町域としては隣の坂東屋町に属しているようであるので、「坂東屋町の祠」とした方が適切であったかもしれない。

4 中村裕太「タイルホコラツーリズム――信仰を観光する」（『AMeeT』、https://www.ameet.jp/column/225/、二〇一四年一一月二一日、三ページ、二〇一三年一月三一日アクセス）には、京都市中京区朱雀第三壬生賀陽御所町にあるタイルホコラの調査の結果、町内の左官屋がそれを制作したことが明らかになったことが記されている。なお中村は、本報告書にも登場する谷本研とともに、「タイルとホコラとツーリズム」というアート・プロジェクトを二〇一四年以来行っている。「タイルとホコラとツーリズム」については、拙稿「「白川道中膝栗毛」について」（菊地暁、佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ――『北白川こども風土記』から』、小さ子社、二〇二〇年、三二八〜三三二ページ）を参照のこと。

5 全国タイル業協会／全国タイル工業組合『Touch The Tiles ― タイル名称統一百周年記念サイト』、https://touchthetiles.jp/、二〇一三年一月三一日アクセス。

6 谷崎潤一郎「陰翳礼讃」、『谷崎潤一郎全集』第二十巻、中央公論社、一九六八年、五一九ページ。「ケバケバしい」

というのは、否定的な言い方ではあるが、美学においてはこれも「美的／感性的質」と見なされる。なお前述の中村裕太は、谷崎のタイル嫌悪をモティーフとして、《豆腐と油揚げ》（二〇〇九年）という作品を制作している。

7 村上紀夫『京都地蔵盆の歴史』法蔵館、二〇一七、四六〜五二ページ。

佐藤 守弘（さとう・もりひろ）

一九六六年京都生。同志社大学文学部美学芸術学科教授。写真を中心とした視覚文化とメディアの研究を主として近現代の日本をフィールドに行っている。著書に『トポグラフィの日本近代――江戸泥絵・横浜写真・芸術写真』（単著、青弓社、二〇一一）、『学校で地域を紡ぐ――『北白川こども風土記』から』（共編著、小さ子社、二〇二〇）など。翻訳にジェフリー・バッチェン『写真のアルケオロジー』（共訳、青弓社、二〇一〇）など。最近は、「パンクの視覚文化」（『AMeeT』二〇二二）、「ルーディたちのスタイルとデザイン――2トーンと視覚文化」（『AMeeT』二〇二二）などポピュラー・カルチャー／サブカルチャーに関するテクストも執筆。

お地蔵様とキャラクター：身近な「子どもの守り神」

佐野明子

はじめに

奈良県吉野町へ二〇二二年四月に訪れたとき、お地蔵様の横にピカチュウの石像が並んでいた【図1】。お地蔵様とピカチュウとは、新旧の意外な組み合わせだと思いよく見ると、そこはある石材店だった。たしかにいま、石材店のなかには、アンパンマン、ドラえもん、キティちゃん、スヌーピー、ピングーなどキャラクターの石像を販売している店がある。[*1] 筆者は二人の子ども（五才と八才）を育てていて、アンパンマンやドラえもんのグッズに八年間も囲まれ続けてきたが、そのとき「お地蔵様とキャラクターは似ている」とも感じた。両者は等身が低く丸みを帯びた形状が近い。また、お地蔵様は「子どもの守り神」として信仰され、キャラクターは子ども文化に定着しており、「子ども」という接点もある。そこで本稿では、お地蔵様とキャラクターと

図1　ピカチュウとお地蔵様
（奈良県吉野町、著者撮影）

いう、古からの信仰と現代文化の関係について考えてみたい。

お地蔵様とキャラクターの接続

キャラクターの像は、『ゲゲゲの鬼太郎』の水木しげるロードや、『それいけ！アンパンマン』の香美市立やなせたかし記念館など【図2、3】、各地の観光名所に設置されている。『もにゅキャラ巡礼』という本に、石像、ブロンズ像、FRP像（グラスファイバーを混ぜた強化プラスチック）を含め、全国二六ヶ所のキャラクター像が紹介されているが、像の分類の一つが「地蔵型」[*2]と名指されているのは興味深い。「地蔵型」のキャラクター像は、高さ一メートル以下で、道端にたたずみ、街角を静かに見守るもので、たとえば東急電鉄「桜新町駅」前のカツオとワカメ像がそれにあたる。冒頭でとりあげたピカチュウのようなキャラクターの石像も、ガーデニングアイテムとして庭先に飾ったり、玄関前に置いたりする家庭用品として販売されており、それらもまた、家や近所の人々を見守る「地蔵型」とい

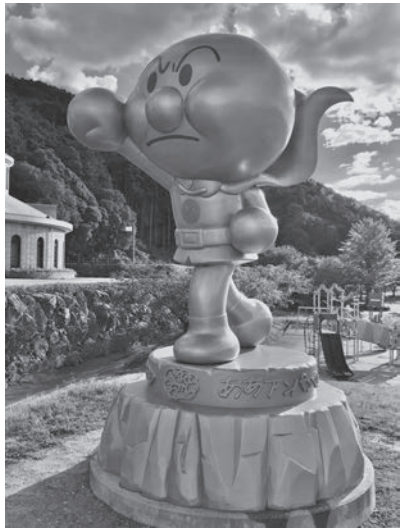


図2　たたかうアンパンマン像
（高知県香美市、著者撮影）

図3　やなせ兎とアンパンマンたちの銅像
（高知県香美市、著者撮影）

えるだろう。お地蔵様とキャラクターは、等身が低く丸みを帯びたフォルムや、人々に親しまれている共通点があることから、地蔵信仰と現代文化が接続するさまがみられるのではないだろうか。

さらに、人々が自ら作る「参加型文化」[*3]となっていることも、お地蔵様とキャラクターに通底する特徴だ。既成のキャラクターの物語や映像を人々が思い思いに制作する「二次創作」がよく知られているが、お地蔵様の二次創作もある。pixiv（イラストや小説の投稿サイト）で「地蔵」を検索すると三八九件ヒットし、「パンク地蔵」「地蔵ちゃん腐女子になる」などテーマの多彩さや、漫画、水彩画、版画、写真、折り紙などスタイルの多様さが目を引く。若者がお地蔵様を「エモい」「レトロかわいい」といった価値を見出している事例のひとつとみなせるだろう（多田論考を参照）。マスメディアでも「お自動さん」という地蔵キャラクターのCMがかつてヒットしており（竹内論考を参照）、企業や市井の人々が協働してお地蔵様のヴァリエーションを創出し受容するサイクルがみられる。デジタルメディア以外でも、木や粘土でお地蔵様を作るワークショップが大山寺（鳥取県大山町）などで開催されてきた。酬恩庵一休寺（京都府京田辺市）の「二十世紀の森」には、信者たちが掘った石像が七二体並んでおり、そのなかにお地蔵様のような石像もある【図4】。このお地蔵様には頭に賽銭がのせられており、参拝客から親しまれているさまが伺えるだろう。「地蔵盆」のような行事（小黒、樋口論考を参照）、「地蔵祠」の建築（佐藤論考を参照）も含めて、人々が積極的に

お地蔵様へ関わってきたからこそ、お地蔵様は今日も親しまれ続けている。

子どもを守るキャラクター

お地蔵様とキャラクターにはこれまでみてきたような接点がある。しかし現在、人々のより身近にいるのはキャラクター（グッズ）ではないだろうか。お地蔵様はそもそも、道祖神として道端に祀られたり、水子地蔵として墓場に置かれたりするため、基本的に屋外にいる。いっぽうキャラクターは、「メディアミックス」[*4]とよばれる多メディア展開で市場規模が比較的大きく、雑誌書籍や映像、玩具、生活用品などポータブルな商品も多いため、商品や宣伝が大量に生活空間に入り込んでいる。

二〇一九年のキャラクター商品小売市場は一兆五五〇〇億円だが、「それいけ！アンパンマン」が第一位、「ポケットモンスター」が第二位、「ミッキーマウス」が第三位、「スヌーピー（ピーナッツ）」が第四位、「ハローキティ」が第五位を占めたのは興味深い。[*5] いずれも乳幼児がターゲットに含まれるキャラクターだからだ。そして、一位のアンパンマンのおもな支持層は五才以下の乳幼児であり、アンパンマンがトップを占めたことは、乳幼児向けのキャラクター商品の需要の高さを示しているだろう。アンパンマンのグッズ展開は多岐にわたり、公式ポータルサイトでは

図4　お地蔵様風の石像
（京都府京田辺市、著者撮影）

「おもちゃ」「書籍・CD／DVD」「食品」「雑貨・インテリア」「ファッション」「デジタル」「サービス」に分類されている。[*6] 寝起きの時の寝具や衣服、食べる時の食器や食品、遊ぶ時の玩具や文具、排泄の時のオムツやおまる、怪我・病気の時の薬品まで、乳幼児の生活用品の多くがアンパンマングッズとして商品化されているのだ。

アンパンマンは「おなかがすいたり、こまっているひとがいたら、どこでもとんでいく　みんなのヒーロー」[*7]である。また、アニメの主題歌「アンパンマンのマーチ」の歌詞は、アンパンマンの作者・やなせたかしによるものだが、最後は「行け　みんなの夢　守るため」と締め括られている。アンパンマンは子どもを「守る」存在なのだ。子どもの様々な生活シーンにおいて、アンパンマンはグッズのかたちで子どもを物理的に助けるときもあれば、心理的に支えるときもあるだろう。

「ワンオペ育児」から母子を守るキャラクター

もちろん、グッズを買うのはおもに保護者である。それでは保護者は、「子どもがアンパンマンを好きだから」グッズを購入しているのだろうか？　アン・アリソンは、日本にキャラクターグッズが多いのは、それが子どもと大人のコミュニケーションを促すからだという。[*8] たしかに、「ワンオペ育児」（一人で育児・家事を担うこと。担い手の多くは母親）が定着している日本において、母子の閉塞した空間のなかでキャラクターという第三者が風穴を開けるさまを推察できる。キャラクターグッズは、子どもの機嫌が良くなったり、子どもの注意が向かったりする、母親にとって役立つツールだからこそ売れるのではないか。

松田青子は育児エッセイで、「「ワンオペ」ことワンオペレーションがどれだけ恐ろしいことかと震撼させられる」「私の実感だと、最低でも三人は欲しい。二人でもいっぱいいっぱいになってしまうというのに、世間では「ワンオペ」が普通のかたちとされていて（中略）多くの女性は、「ワンオペ」に苦しさや限界を覚えながらも、それ以外の選択肢が無い」[*9]と現状を鋭く指摘した。じっさい、二〇一六年における六才未満の子どもを持つ夫婦の家事・育児関連時間を七カ国で比較すると、日本は妻が夫の約五・五倍で男女格差が最も高く、次点のフランスは妻が夫の約二・二倍、男女格差が最も低いスウェーデンは妻が夫の一・六倍の時間を一日あたりに費やしている。[*10]「キャラWalker」というウェブサイトに並ぶ「スヌーピーなどのキャラクターがママをサポート！」「子どもと過ごす時間が増える夏休みシーズン。ちょっとしたお悩みや負担を解消してくれる、かわいいキャラクターグッズの力を借りて、毎日を楽しく過ごそう！」[*11]といったフレーズは、たんなる誇張された宣伝文句ではなく、母親たちの「キャラクターの手も借りたい」多忙さを指し示しているだろう。

いっぽう、岸田文雄首相が二〇二三年一月二七日の参院本会議で「育休中の学び直しを後押しする」旨の答弁をして問題視されたように、[*12] 育児の過剰負担は未だ十分

に認識されていない。二〇二一年の女性就業率は七一・三％にのぼるいっぽう（一五―六四才女性）[13]、女性ひとりで仕事と家事・育児・介護・看護を全て担う「新・性別役割分担」[14]が日本において当然視されている。二〇二〇年における女性の非正規雇用労働者は五四・四％（男性は二二・二％）だが[15]、この数値が示すのは、女性はパートタイム労働か、正社員でも出産すると「時短勤務」を選択し、男性が長時間労働で家にいない間に女性が家事とケア労働をこなすかたちが定着している日本の現状だ。

こうしたことが、乳幼児向けキャラクター商品の需要をもたらしている一因ではないか。アンパンマンをはじめキャラクターは、子どもや母親のそばにいて子育ての一助になる、現代の「守り神」としても存在しているのではないだろうか。

1 たとえば「有限会社　秋元石材店」では、キャラクターの石像のほか、タイル、ペーパーウェイト、表札も扱っている。https://akimotosekizai.com/character-stone（二〇二二年二月一日確認）。キャラクターストーンのグッズ販売に特化した通販店もある。「キャラクターストーンショップ TAKAO」https://www.stone-char.jp/item/item_other.html（二〇二二年二月一日確認）。

2 楠見清、南信長（二〇一七）『もにゅキャラ巡礼　銅像になったマンガ＆アニメキャラたち』扶桑社、一〇頁。

3 Jenkins, Henry (2006) *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide*, New York University Press.

4 マーク・スタインバーグはメディアミックスについて「一つの作品やキャラクター、物語世界を複数のメディアやプラットフォームに翻訳または展開すること（再利用ともいう）、および、複数の作品を相乗的に利用して、同じフランチャイズやグループ内の他の作品を販売することという、二つの興味深い現象がある」と言及している（Steinberg, Marc(2012) *Anime's Media Mix: Franchising Toys and Characters in Japan*, Minneapolis: University of Minesota Press, p.142.）

5 「キャラクター・データバンク『CharaBiz DATA 2020(19)』を発刊　キャラランク3位はミッキー、2位はポケモン、1位は・・・」『PRINT&PROMOTION』https://p-prom.com/promotion/?p=42419（二〇二三年二月一日確認）

6 『それいけ！アンパンマン』https://www.anpanman.jp/（二〇二三年二月一日確認）

7 「アンパンマンについて」『それいけ！アンパンマン』https://www.anpanman.jp/about/friends/4zvqlpab9ixejb6d.html（二〇二三年二月一日確認）

8 Allison Anne(2006) *Millennial Monsters: Japanese Toys and the Global Imagination*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, p.91.

9 松田青子（二〇二二）『自分で名付ける』集英社、一一五―一一六頁。

10 「コラム1　図表2―2　6歳未満の子供を持つ夫婦の家事・育児関連時間（週全体平均）（1日当たり，国際比較）」『内閣府男女共同参画局』https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/zuhyo/

zuhyo01-c01-02-2.html（二〇二三年二月一日確認）

11 『キャラWalker』https://sp.walkerplus.com/charawalker/topics/topics_1041878/（二〇二三年2月一日確認）

12 「岸田首相「育休中の学び直し支援」発言に批判続出 「希望が前提」釈明」『京都新聞』二〇二三年一月三一日 https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/964840（二〇二三年二月一日確認）

13 「第2図 女性就業率の推移」『内閣府男女共同参画局』https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/html/zuhyo/zuhyo02-02.html（二〇二三年二月一日確認）

14 上野千鶴子（一九九〇）『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、二一四頁。

15 「第一節 就業をめぐる状況」『内閣府男女共同参画局』https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/html/honpen/b1_s02_01.html（二〇二三年二月一日確認）

佐野 明子（さの・あきこ）

同志社大学文化情報学部准教授。JoMAメンバー唯一の京田辺キャンパスに二〇二〇年着任。学生時代は農学部獣医学科に所属するいっぽう映画に熱中し、大阪のプラネット（現・神戸映画資料館）に通う。大学院から映画研究を始め、冷戦下チェコのヌーヴェルヴァーグと実験映画の研究、戦時下の日本アニメーション研究を経て、観客論や計量映画学も手がける。文理問わない領域横断的な方法論を模索中。博士（言語文化学）。子ども二人を育てるなか、研究会や職場の多大な理解に助けられて研究を継続できた。エッセイで言及したアンパンマンのメディアミックス論がMechademia Vol. 16.1 (autumn 2023) に掲載予定。

地蔵祠がとってもエモいから

——価値主導型地域マーケティングの可能性

多田 実

1. はじめにエモいありき

近頃では若者の日常会話でフツーに使われるようになった「エモい」という言葉。この言葉の由来や、誰が世の中に広めたのかなど、諸説あるのだが、ネット検索してみると、二〇一六年に行われた某有名メディアアーチストのインタビュー記事が発端になり、二〇一七年頃から急速に広まったとの見方が有力視されているようだ。

筆者は、昔から音楽が大好きで趣味のギター演奏は高校二年頃から今もなお続けており、教育実習の先生（教生）としてお世話になった高校の文化祭に音楽好きの実習生どうしで「教員バンド」なるものを結成・出演したという武勇伝がある（笑）。それからずっと、人前で演奏するチャンスがないかと常に探求しているため、音楽関係者やバンド仲間との出会いに恵まれた。彼らとの会話を振りかえると、昔（一九八〇年代中頃）から「エモい曲」という表現を何度も耳にした記憶がある。そのため、個人的には、エモいという表現はミュージシャンや音楽マニアがそのルーツだと思っている。しかし、その使い方には明確な定義などはなく、「鳥肌が立つ」ような曲であればイコール「エモい」になり、二〇二二年小学生流行語一位になった名言（?!）「それってあなたの感想ですよね」と突っ込まれるかもしれない（笑）

本稿では、地蔵祠（じぞうほこら）のエモさに注目して、持続可能なまちづくりや地域活性化、さらには地域マーケティングの観点から考える地域や公共に関わる教育・研究について言及する。そのためには、もう少し「エモい」についての経験談を私生活と教育・研究の両方から紹介する必要があり、どうしても前置きが長くなってしまうことをお許しいただきたい。

音楽の他にも、スポーツ観戦が趣味で、野球やサッカーの試合で、筆者は、しばしば鳥肌が立つ。一般的には、観戦している選手のプレーの素晴らしさによる感動的なエモさであることが多いが、テレビやネットではなく球場やスタジアムに行くと別のエモさに気づく。日本一熱狂的な応援と言われる阪神甲子園球場のライトスタンド。

コロナ禍により声出し応援が禁止になっていた時期もあったが、トランペットの応援歌に合わせて観客が一体となって大声で歌うあの雰囲気はとても情緒的で、学生の頃は、ライトスタンドで知らない観客と顔馴染みになるぐらい、そのようなエモさを求めて、足しげく甲子園に通ったものだ。このエモさにおいて、選手応援歌という音楽の存在は、極めて重要であると考えられる。ちなみに、そのエビデンスというほどではないが、前述の教員バンドで教育実習先の文化祭に出演したとき、ギターソロタイムで阪神タイガース選手応援歌メドレーを弾いたときの盛り上がりは今でも忘れられない。

2. 大学教育におけるエモい実践的活動

その後、大学教員になってからも、新たなエモいを発見することになる。現在の所属先である同志社大学政策学部が、二〇〇八年度文部科学省が選定する「質の高い大学教育推進プログラム（通称：教育GP）」に「政策提案能力を養う理論と実践との交流教育」というテーマで採択されたことが契機となって、京都府地域再生活動との連携を担うことに。筆者がその公開シンポジウム「ローカルメディアと地域の再生――地域の固有価値を発信する」において司会進行を務めたとき、南信州から来られていたゲスト講師との運命的な出会いから、二〇一一年夏に飯田市役所と同志社大学政策学部多田ゼミナールが初めて〝共働〟開催する形での記念すべき音楽イベント

「iidastock（イイダストック）」が長野県飯田市千代地区で実現した。このステージで、当時、国民的アイドルと呼ばれていたAKB48の曲をゼミ生と披露することになり、観客との一体感を得るため「ミックスの打ち方講座」を前説（まえせつ）っぽく演奏前に行った。「ミックスを打つ」とは今もなお頻繁に行われているアイドルステージでの掛け声（よっしゃいくぞー、タイガー、ファイヤー…）のことで、これがまたとてもエモい！一般的なマーケティングのトレンドとして、「モノ消費」ではなく「コト消費」に注目されるようになっている昨今、アイドルの音楽イベントに参加することによって得られるエモい価値が「ミックスを打つ」コトに感じられる。

若者にエモいという言葉が浸透し始めた二〇一七年春に、多田ゼミ一二期生公式インスタが開設され、そのプロフィール欄にはゼミの活動で価値主導型マーケティングを考慮したフィールドワークを行うことを次のように紹介しており、当時、「なるほど！エモいってそういう意味だったのか」といった反応が少なからずあったことを覚えている。

同志社大学政策学部多田ゼミ12期がリレー形式で投稿する公式Instaアカウント
エモいとは感情・感動といった意味の英語〝emotion（エモーション）〟を略したものに形容詞化する接尾語『い』をつけたものである。※エモいを投稿します

図1　「多田ゼミ 12k」公式 Instagram
https://www.instagram.com/tds12k/

エモいという若者言葉は、上述のとおり、一般論として二〇一六〜二〇一七年頃から使われるようになったとのことだが、多田ゼミではその前から「エモいを探す」ことをフィールドワークにおける活動の軸にしていて、二〇一五年秋の大学周辺フィールドワークにおいて、「新町エリア」の魅力を再発見して、その様子を一〇期生ゼミの公式 Twitter で公開している。【図2】は、その投稿の一部であるが、若者が地蔵祠をエモいと感じて写真付きで投稿していた。この活動における投稿にはハッシュタグ「#エモい新町」をつけているので、今でも検索して確認することができる。ちなみに、当時、若者が使うSNSはインスタより圧倒的にツイッターだった。

ハッシュタグといえば、MBS毎日放送で『NMB48 の#エモスト』という名のテレビ番組が二〇二〇年一〇月二三日から放送されている（木曜深夜に不定期で放送されるバラエティー番組）。アイドルグループ「NMB48」のメンバーが話題のスポットへ行き、スマホを片手にエモい瞬間を撮りながら自由に楽しむバラエティー番組で、撮影中に撮られた写真や動画は、番組公式インスタグラム（https://www.instagram.com/nmb48_emosuto/）に投稿される。投稿時に付けられるハッシュタグ「#エモスト」は、エモい・ストーリーの略らしい。最初何のことかわからなかった「スト」はインスタグラムの「ストーリーズ」機能（短尺動画）のことのようだ。

図2
「多田ゼミ 10k」公式 Twitter
https://twitter.com/tada10k/status/658903140591255552

3. 価値主導型でエモいを地域マーケティングに活かす

実は、教育や研究にエモいを考えるようになったのは、マーケティング研究の世界的権威フィリップ・コトラー教授が二〇一〇年に出版した『コトラーのマーケティング3.0——ソーシャル・メディア時代の新法則』（朝日新聞出版）からで、この書籍では、主に企業経営において、SNSで「バズらせる」には、従来型のマーケティング手法では不十分で、「ハート・マインド・スピリット」といった精神的な価値の重要性が説かれており、それらを基にして「価値主導型マーケティング」としてまとめている。また、企業経営のみならず公共性の高い、社会を良くするための「ソーシャルマーケティング」との相性の良さも示唆されていたため、この概念を援用することが契機となり、教育・研究においてエモいを地域活性化に関わる活動の軸にするようになった。

この概念を意識してフィールドワークを行うと、地域に潜む価値に出会える可能性が高まる。たとえば、上記「2. 大学教育におけるエモい実践的活動」で紹介した「#エモい新町」のフィールドワークでは、新町キャンパスから徒歩数分の所に、「日本一（京都一？）狭い駄菓子屋さん」をゼミ生が見つけ、店主さんに写真撮影の許可もいただいて取材・ツイッター投稿をさせていただいた。このような、おそらくガ

イドブックなどでは紹介されていないと思われるお店は、潜在的な地域の価値として考えることができ、事実、ゼミ生たちはそのエモさに感激していた。

もう一つエモい地域のお話しを。二〇一四年の冬に、滋賀県近江八幡市の小学生が自分たちの住んでいる町の良さを発表して地域の魅力を再発見するイベントが開催され、コメンテーターのような形で招待されたとき、一人の小学生の女の子が「わたしがいちばん好きな場所は〇〇公園の曲がり角」みたいなことを話した。それを聞いた司会者は「なぜそこが好きなのかな?」と問いかけると、「いい風が吹くから」と答えた。それを聞いていた小学校の先生はどこか浮かない顔をしているように見えた。近江八幡には観光名所や有名なお店など沢山あるのに何故そんな所を紹介するのか、と考えていたように思う。もちろんコメンテーターとして、このような感性に訴求するような話しをしてくれた女の子に最大級の賛辞をしたことは言うまでもない。この感性を大切にして成長すれば、将来、彼女は、『風に吹かれて』のヒット曲で有名なボブ・ディランのように、ノーベル文学賞を狙えるかもしれない? 笑

以上を踏まえて、地蔵祠×価値主導型マーケティングによって期待できる地域活性化での有用性について筆者の考えを示す。まず、地蔵尊は若者にとってエモい存在であることがゼミのフィールドワークにより明らかになっているので、SNS上でのエモい写真コンテスト(ゼミでは #エモコン と呼んでいる)はどうだろうか。イマドキの若者は、SNS(主にインスタ)映えするコンテンツとして「レトロかわいい」に反応することが多いようなので、地蔵祠は十分に映えるオブジェになり得るだろう。さらには、YouTubeなどでの動画投稿サイトで人気のスタイルの一つとして確立している「Vlog(Video blog)」が、地蔵祠が何気ない日常の風景の中に存在する、まさにエモい存在として撮影する題材に向いていると考えている。これらのアイデアは、おしゃれなカフェなどを素敵に紹介するだけでは十分とは言えず、沢山のユーチューバーやインスタグラマーで溢れかえる今日、人間の感情的な部分に訴求するエモい価値を与えるオルタナティブなコンテンツとして地域活性化に役立てる、コンテンツ・マーケティング・アプローチの切り札になると考えている。

最後に、フィールドワークに関連するメディア関連の話題を。筆者は昭和の時代、自他とも認める「テレビっ子」で、何かと話題になるNHKの「ブラタモリ」の原型と言えるような、MBS毎日放送の「夜はクネクネ」(一九八三年〜一九八六年放送)が大好きだった。当時は、エモいなんて言葉は存在しなかったが、今考えると、この番組はとてもエモかった! 有名な観光スポットや名店などをロケで紹介するのではなく、何気なく関西の街を歩き、出演者の原田伸郎とMBSアナウンサーの角淳一が、偶然出会った人とトークするバラエティー番組だった。これは、本稿で最も伝えた

かったポイントである、特筆すべき観光スポットや名産品がなくても、地域の潜在的な魅力にフォーカスする価値主導型マーケティングの概念に通じるということを、令和の時代になり、地蔵祠のフィールドワークを研究仲間で行ったときに数十年ぶりに思い出した（【図3】は「大人の遠足」のような京都の街を「クネクネ」した写真）。温故知新、地蔵祠をメインコンテンツにしたメディア系の作品はイマドキのZ世代の若者の心に刺さると確信している。

図3　地蔵祠フィールドワークの様子（2023年7月3日筆者撮影）

多田 実（ただ・みのる）
大阪生まれ大阪育ち生粋の関西人。最初の勤務先龍谷大学深草キャンパスへ通うため、京都市内に引っ越し、その後、宇治市を経て、現在奈良市民。高二の冬休みに購入したストラトキャスターでハードロックにハマる。文科省が選定する二〇〇八年度「教育GP」に政策学部が採択されたことが契機となり、地域におけるメディア活用として京都府北部エリアのPV制作などに従事。その講演会で長野県飯田市から来られていたゲスト講師との運命的な出会いにより、音楽イベントを南信州エリアの市町村と協働開催することが実現し、今もなおゼミ生とバンドを組んでギタリストとして参戦している。専門は経営科学、マーケティングリサーチ。博士（工学）

「地蔵」表象が映す社会

――昭和から令和、テレビ・コマーシャルと横尾忠則「20年目のピカソ」から

竹内幸絵

「町」という京都の地域コミュニティの中心に地蔵・地蔵祠が多く存在する一方、日本文化にはこれとは趣を異にする「地蔵」のイメージが存在している。「笠地蔵」という民話の題名を聞けば、誰もが赤いよだれかけをかけ、「町」ではなく、田畑が広がる田舎道の傍に立つ地蔵の姿を思い浮かべるのではないだろうか。京都の地蔵は、本冊子前段のシンポジウムでも詳らかにされたとおり明治以降の近代化の中で存在感を増し今日に至っているが、「笠地蔵」を典型例とする「地蔵」の表象は、おそらくそれ以前から存在している。しかしこの稿のテーマはそのような「地蔵」の表象がいつから伝承されてきたのか、ではない。日本人のなかにいつのころからか存在してきた「地蔵」の表象が、戦後どのように継承されてきたのか、である。本稿では昭和から令和まで、およそ五〇年間のテレビ・コマーシャルなどの動画コンテンツにおける「地蔵」の使われ方、持続してきた「地蔵」の姿を確認してみたい。戦後の大衆文化を拡大する役割を担ったテレビジョンで「地蔵」はどのように表現されてきたのか。それは何を映してきたのだろうか。

1. 一九七〇年代CM「お地蔵」：福岡銘菓「ひよ子」――民話の姿のままで

「テレビCMデータベース運用協議会」が運営する「20世紀のテレビCMデータベース」[*1]には一九五〇～一九九〇年代に制作された日本のテレビCMが一万五二六六本（二〇二〇年六月現在）収録されている。このデータベースのキーワードに「地蔵」と入力し検索すると一点が選びだされる。タイトルは「お地蔵」、三〇秒のカラー・コマーシャルである。広告物は、ひよこの形をした福岡銘菓のまんじゅう「ひよ子」である。当データベースには構築時、フィルムケースなどから書き取った各種の情報が入力されている。これによると制作会社は博報堂と東京フイルムコーポレーション、スポンサーは「ひよ子」を今日も製造・販売している福岡の会社、吉野堂[*2]である。制作年は記載されていない。一九七八年にオンエアされたCMソングが異なる「ひよ子」のCMがYouTube上で確認できる。両者の登場人物の服装や髪型の比較から「お地蔵」は、これよりも古いフィルムと推察できる。一九七八年よりも前、そしてカラー・コマーシャルの普及が一九六〇年代末から一九七〇年前後であったことを踏まえれば、「お地蔵」は一九七〇年代前半の作品と思われる。

三〇秒の流れはこのようなものだ。まずはセリフ。（♪は歌）

♪　お元気でしたか？

祖母「おーおーよう帰った、けんちゃん大きくなっちゃって。おばあちゃんひっくり返っちゃうよ。あはははは。」

けんちゃん「どうして石のっけんの？」

田舎に住む男児「おまじないだよ」

けんちゃん「ふーんおまじない？」

♪　時々会おうよ〜ひよ子ー、持ってこね。

ナレーション「贈り物、おみやげに、銘菓『ひよ子』」

最初の情景は畑の中にあるバス停。祖母と白いTシャツと半ズボン姿の男児がバスを待っている。待合小屋の横には赤いよだれかけをかけた石の地蔵が立っている。バスが到着すると都会的な服装の夫妻が「ひよ子」の箱を数箱持ち、ハンチング帽の小学低学年の男児とともに降り立つ【図1】。祖母の歓迎のセリフの後、田舎の男児（おそらく従弟）が地蔵の頭に石を乗せる。これを見た「けんちゃん」[*3]が理由を尋ねる【図2】。会話ののち、「けんちゃん」はまんじゅう「ひよ子」を一つ、地蔵の手に乗せる。カメラは引いていき、五人は連れ立って去っていく。

図1
テレビCM「お地蔵」、福岡銘菓「ひよ子」吉野堂、
制作：博報堂、東京フイルムコーポレーション、1970年代前半作。
バスから降りる3人と迎える2人を、頭に石を乗せ赤いよだれかけをかけた地蔵が見守る。

バス停の文字は「生神」と読めるが、CM内の架空の田舎と思われる。[*4]「地蔵」は民話「笠地蔵」さながらに田舎道に立つ。「おまじない」とされる地蔵に石を積む行為は、賽の河原で早世した子供が石を積んで地蔵菩薩の救済を待つ言い伝えになぞらえているのだろう。CMはそれを焦点化せず、明るい音楽や帰省の喜びの表現とともに、言い伝えをただ従弟間のコミュニケーションのきっかけとして描いている。しかし画面の端々で「地蔵」は終始人々を見守っている。そして都会っ子が知らない「地蔵」にまつわる不思議なおまじないを通して、「地蔵」の祈りと救済の意味をほのめかしている。「ひよ子」を賽の河原の石とともに供える行為は、ほほえましい「祈り」となって、広告の意味を深めている。

2. 一九八五年、みんな仲良く／なかよし地蔵——救済する地蔵

続いて一九八五年の公共広告機構のCM「なかよし地蔵」。[*5]アニメーションCMで、声優は市原悦子と常田富士男。つまり「まんが日本昔ばなし」[*6]のスタッフで制作された昔話風アニメ・コマーシャルである。制作は電通大阪。

地蔵が立つ寺の境内で遊ぶ五人の村の子供たちがいじめっ子に困らされる。そこに髪の長い女の子が現れ子供たちを助けようとする。ところがそのいじめっ子は過って自ら川に落ちてしまう。女の子は長い髪をロープにしていじめっ子を助けにかかる。村の子供たちも協力し、ようやく岸に上がったいじめっ子と五人の村の子がふと見る

図2
出典（図1）と同じ。
田舎の男児が地蔵の頭に石を乗せる。

【図3】と、地蔵の顔が濡れている。女の子はもういない。そして地蔵はにっこり笑う。「みんな仲良く」「公共広告機構」の文字。

公共の平穏を乱す輩を地蔵が諭す。切り絵調のイラストと、地蔵の化身の女の子という物語展開はいかにも「まんが日本昔ばなし」だ。ちなみに「まんが日本昔ばなし〜データベース〜」[*7]で「地蔵」をキーワード検索すると一四七四話中七二話に「地蔵」が検出され相当な数だと分かる。このCMは、同番組が形成した昭和のアニメの「地蔵」表象の典型を利用したものといえるだろう。

3. 一九九〇年、JARO CM「ぶつぞう編」——訴える地蔵

一九九〇年には、広告・表示を審査する民間団体、JARO（公益社団法人 日本広告審査機構）がCMに「地蔵」を起用している【図4】。「JAROのテレビCM40年史」はこのように解説する。「お地蔵さんが『ぶつ』と言うと『広告に関する苦情、お問い合わせ、相談は』とナレーション。ぶつぶつ言うお地蔵さんが二体、三体と次第に増え、最多になるシーンでは一二体にも。『ぶつぶつ言わないでJAROまでお電話ください』とナレーションが入ると、仏頂面だったお地蔵さんが温和な顔に。最後は、『はい、こちらJAROでございます』という相談員の女性の声が聞こえ、地蔵さんが『ぶつ』と電話で苦情を伝えます。撮影に使ったお地蔵さんは発泡スチロール製で、撮影後は日本に在住する海外のお地蔵さん愛好家に引き取られていきました」[*8]。

図3　テレビCM「みんな仲よく」、AC公共広告機構、制作：電通大阪、1985年

図4
テレビCM「ぶつぞう編」、JARO、1990年

ここでの「地蔵」は広告に関する苦情を相談する側に立っていて、問題を解決する側ではない。しかし、公共の平穏を乱す事案に対して申し立て、そしてそれが受け入れられて温和な顔になる、という流れは、「なかよし地蔵」と共通する社会救済の表象である。このCMは平成二年の作ではあるが、昭和の「地蔵」表象を継承している。その一方で、「仏」像である「地蔵」が「ぶつぶつ」言う、とダジャレで茶化し、「地蔵」の表象を現代社会に引き寄せている。

4. 一九九六年アイフル自動契約機「お自動さん」——キャラクター化する地蔵

このように昭和の「地蔵」は社会不安を救済する存在としてあらわされていた。旧来からあった不安を和らげる、祈りと救済の存在としての「地蔵」表象の現代版といえるだろう。ところが平成に入ると、とあるシリーズCMのヒットによってCMにおける「地蔵」像は大きく転換する。シリーズの名は「お自動さん」。CMで「地蔵」が世間話で「お自動さん」を噂する【図5】[*9]。誰もが知る「地蔵」像をうまく換骨奪胎し、キャラクター化で成功したCMである。

もちろん地蔵＝自動はダジャレである。「お自動さん」CMの「地蔵」は、公共への貢献や、賽の河原の救いと何ら関係していない。一九九三年、大手消費者金融のアコムが「むじんくん」と名付けた自動契約機を導入し知名度の向上に成功、これを追ったアイフルの自動契約機が「お自動さん」だった。このころ、一九八九年から

図5　テレビCM「お自動さん」、アイフル、1998年

一九九八年のテレビ・コマーシャルの傾向を、制作当事者が「コトバがひとりあるきした時代」[*10]だったと述懐している。見た目の意味をはみ出した言葉遊びによるCMが、この頃多く制作されたという証言だ。「お自動さん」はその典型例だったのだろう。地蔵菩薩という仏をキャラクター化した同CMは、旧来からあった祈りと救済といった記号の意味を超えた「地蔵」の表象を創出した。以降CMにおいて「地蔵」はより自由に使われる存在となっていく。

5. 二〇〇一年　横尾忠則「20年目のピカソ」——祈りと救済の意味の継承

平成以降、CMの中での「地蔵」は、祈りや救済といった従来の意味を薄めていた。ここでテレビCMから少し横道にそれ、ポスターなど商業デザインから創作活動を開始した横尾忠則の作品の中の「地蔵」にふれてみたい。ここで見る作品の表題は「20年目のピカソ」。横尾がアーティスト（芸術家）宣言をする契機となった一九八〇年のピカソ展の展覧の体験を、二〇〇一年に自ら回顧した油彩画である。

同作の画面の左上には、一九八〇年に開催された「ピカソ展」のカタログの表紙【図6】に描かれたピカソの自画像が描かれている。ピカソが画面の下方を覗き込んでいる設定だ。覗き込まれているのは幼少期の横尾。それも逆さになった滝壺の中のつり橋を渡っている。みるものに恐怖を感じさせる強い主張のある画だ【図7】。

横尾の「20年目のピカソ」は、バルセルナのピカソ美術館で二〇一四年に開催され

図6
パブロ・ピカソ「自画像」油彩、1907年を表紙とした、1980年のニューヨーク近代美術館「ピカソ展」図録。

た「ポストピカソ」展で展示されたが、その図録では以下のように概説されている。

「《20年目のピカソ》は横尾が一九八〇年にニューヨーク近代美術館で受けた啓示を思い起こさせると同時に、彼の幼児期の記憶を幻覚のように示すものでもある。ピカソ（《自画像》一九〇七　に基づいている）が見守るなか、二人の子どもが木製の橋を渡っているのだが、その橋は巨大な滝壺の上に上下逆さまになっているのである。"Only in desperation is true art achieved"という文字が丸太の縁に書かれている。」[*11]

横尾自身は二〇一八年のインタビューで、一九八〇年にピカソを観た際の体験を「大げさな言い方ですが、絵を見ながら『いかに生きるか？』という問題に直面していました。だから冷静さを欠いているわけです。『ここはこういう風に描いているな』なんてまるで考えられないわけですね。目と脳が直結せずバラバラになっちゃっているような感じでした。頭でものを考えられなくなっ」[*12]た、と回想している。

実はこの絵の中に、お地蔵さんが潜んでいる。子供が歩く逆さになった滝つぼの崖の中に小さな小さな地蔵がおよそ五〇体、埋め込まれているのだ。【図8】はその一体である。

糸井　小さなお地蔵さんに印象的な赤いよだれかけがついていたり。

横尾　ああ、これね。たぶん、パーンとした大きなものより克明に見てる間に発見したものに対しては「自慢もしたいけども」というところかな。

図7
横尾忠則「20年目のピカソ」2001年

図8　横尾忠則「20年目のピカソ」部分。本作の崖にあたる部分には、近づかないと気付かないほどの小ささで様々な形の地蔵がおよそ50体描かれている。祠を持つ地蔵もある。そして地蔵と似た描き方で石の男根も多数描かれている。

図7、図8出典：世田谷美術館、兵庫県立美術館編『冒険王・横尾忠則』国書刊行会、2008年、37頁

糸井　ふふふ。

横尾　でも、一方でさ、こんな絵で恐怖をいだかせちゃうんじゃないかという心配もあるわけ。

糸井　わかりますよ、これは悪夢ですもん。[*13]

二〇〇八年に開催された「冒険王・横尾忠則」の会場[*14]での糸井重里と横尾の対談の一部である。横尾は一九八〇年からの二〇年間の自身のピカソ体験の「恐怖」を和らげる意図で、「地蔵」を画中に潜ませたと言っている。ここにはテレビ・コマーシャルにおいて換骨奪胎された「地蔵」ではなく、祈りと救済のイコンとしての「地蔵」がある。悪夢を祈りによって救済する「地蔵」を、横尾は崖の中に極めて小さな姿で多数埋め込んだのである。ここからは、「地蔵」に対して日本人が旧来から持ってきた記号的意味の継承、平成以降のコマーシャルでのキャラクター化によってそれがすべて消し去られたわけではなかったことがよみとれる。

6. 二〇〇八年「笠地蔵の恩返し」ACジャパン・学生コンクール
——Net社会の不安と地蔵

テレビでオンエアされたフィルムではないが、ACジャパンが主催した「第四回公共広告学生賞」[*15]で二〇〇八（平成二〇）年に優秀賞を受賞した作品に「笠地蔵の恩返し」[*16]がある。三〇秒の作品で、テーマは「個人情報流出問題」。切り紙細工のアニメーションでこのような内容だ。雪降る中地蔵に笠をかけるおじいさん。その夜地蔵たちが財宝を持っておじいさんの家にお礼にやってくる。喜ぶおじいさん。ここまではお決まりのストーリーだ。だがおじいさん、ふとつぶやく。「なんで地蔵さまはおらの住所知っとるんじゃ？」。

次の画面では、おじいさんの個人情報（住所：川のほとり、誕生日五月三〇日、特徴：やさしい、親切）がパソコンに大写しされる。次第に画面が引いていき、パソコンの手前に大勢の顔の見えない人影（地蔵の影）が【図9】。最後には赤鬼と青鬼も浮かび上がる。「ネット社会無防備な主人公になっていませんか？」と文字がフェードインし、音声「♪AC～」。

「地蔵」は、このCMでは表情のない恐怖を齎す不特定多数として描かれる。「地蔵」の持つ救済の超能力の知名度を逆手にとり、見えない社会的圧力の恐怖の象徴として「地蔵」を描いているのだ。「地蔵」の記号的意味（超能力で救済する）が知られているからこそ、このパロディが可能になった。しかし「地蔵」はここでは石の仏であり、笑いも泣きもせず無表情である。

図9　ACジャパン・学生コンクール「第四回公共広告学生賞」優秀賞受賞テレビCM作品「笠地蔵の恩返し」、制作代表者：樋口紘美（日本大学藝術学部）、2008年

7. 二〇二一年 Vaundy「泣き地蔵」ミュージック・ビデオ
——Net社会の不安と地蔵

最後に二〇二一年一〇月一九日に発表された楽曲・ミュージック・ビデオ（MV）を最新の事例として紹介しよう。「笠地蔵の恩返し」CMと同様、「地蔵」の超能力と無表情というよく知られた表象が、ここではネット社会の危険と闇とに結びつけられている。

Vaundy（バウンディ）の「泣き地蔵」[*17]。公開時のニュースリリース[*18]には「最新テクノロジー、バーチャルプロダクションで表現された」とあり、監督のMIZUNO CABBAGEは以下のように制作意図を書いている。「人の不幸を娯楽コンテンツとして見ていませんか？という人々への警告をテーマにMVを制作しました。昨今SNSで人の不幸や災難を目にする機会が増えました。しかしそれを簡単に流し見したり、コンテンツとして消費してしまうことがあるように思います。自分でも無意識でそういう見方をしてしまうことがあります。そんな自分や人々に対する警告」。

MVでは大勢に取り囲まれ恐怖におののく女の顔が「地蔵」に変わり、涙を流す。それを傍観していた男が次の標的とされ、フラッシュをたく多くのカメラに取り囲まれる。恐怖から男の顔も「地蔵」に変わり、涙を流す【図10】。祈りと救済のイコンである「地蔵」の涙は、ここでは抗えない見えない相手への恐怖の大きさを象徴する。

図10　ミュージック・ビデオ「Vaundy『泣き地蔵』」、監督：MIZUNO CABBAGE、2021年

本稿はここまで昭和から令和までのテレビ・動画における「地蔵」の表象をみてきた。実際に「地蔵」に手を合わせた時、私たちには石仏である地蔵菩薩のお顔が、時に微笑みに、時に泣き顔にも見える。そのような原体験が「地蔵」を祈りと救済のイコンと感じる所以なのだろう。そうした記号的意味は令和の今日にも継承されている。しかし昭和の「なかよし地蔵」や「ぶつぞう編」では社会不安を救済し笑顔となった「地蔵」は、今日ではNet上の不特定多数、あるいはその恐怖を救済できずに涙する存在として描かれている。託された思いによって変化する「地蔵」の表象は、社会と時代を映している。

1 https://www.arc.ritsumei.ac.jp/database/CMdb/　20世紀のテレビＣＭデータベースはＪＳＰＳ科研費（JP19HP1234）の助成を受けデジタル化された。「お地蔵」は作品No.: JAC30-04622。画像引用元も同データベース内。なお同データベースは「テレビＣＭデータベース運用協議会」が運営・管理しており、研究または教育目的に限り、同協議会の承認を経て閲覧が可能。手続き詳細は右記ＵＲＬを参照。

2 同社ホームページによれば現在の会社名称は「株式会社ひよ子」。一九八七（昭和六二）年一〇月にグループ会社四社を合併し社名を変更している。

3 「けんちゃん」はハンチング帽をかぶり半ズボン姿。ＴＢＳ系列で一九六九年から一九八二年に全国放送された人気子供向けドラマ「ケンちゃんシリーズ」の主人公を彷彿させる「都会の子供」の表象として描かれている。

4 「生神」が付く地名は全国で、石川県の富来生神（とぎうるかみ）のみである。

5 https://www.youtube.com/watch?v=HJAh1kmUHu4　より画像引用。

6 テレビアニメ「まんが日本昔ばなし」は一九七五〜一九九四（昭和五〇〜平成六）年、ＴＢＳ系列で放送された。

7 http://nihon.syoukoukai.com/　全一四七四話の「まんが日本昔ばなし」のストーリーが文字化されデータベース化された非公式サイト。サイトの管理者は「古里紅子」。

8 https://www.jaro.or.jp/jaro40/j_tvCM/90-02.html「設立40周年記念特集2、ＪＡＲＯのテレビＣＭ40年史」ＪＡＲＯ公式ホームページ内。画像引用元も同一。

9 https://www.youtube.com/watch?v=EiUgc32Hois より画像引用。

10 日本アド・コンテンツ制作社連盟編『THE CM』宣伝会議、二〇一二年、八二頁。山崎高明（電通所属の広告制作者）の発言。

11 https://www.tadanoriyokoo.com/vision/2014/05.html「Tadanori Yokoo Official website」内二〇一四年五月三〇日の「横尾忠則の日記」。「20年目のピカソ」画像引用元も同一。

12 https://bijutsutecho.com/magazine/special/promotion/18094「『ピカソが僕を変えた』横尾忠則、ピカソを語る。」Web版美術手帳、二〇一八年七月二三日。

13 https://www.1101.com/boukenoooo/2008-06-01.html「ほぼ日刊イトイ新聞」「冒険王、横尾忠則。」二〇〇八年六月九日号。

14 この対談は世田谷美術館で行われた。（世田谷美術館開催：二〇〇八年四月一九日〜六月一五日）その後兵庫県立美術館（六月二七日〜八月二四日）へ巡回。

15 https://www.ad-c.or.jp/campaign/CM/pdf/archive/04.pdf「『第4回公共広告ＣＭ学生賞発表』ニュースリリース」二〇〇八年三月二六日、汐留電通ホール。一一八作の応募があり一四作が受賞している。

16 https://www.youtube.com/watch?v=HKcv3RWfzoo「笠地蔵の恩返し」日本大学藝術学部、代表：樋口紘美氏の作品。

17 https://www.youtube.com/watch?v=XQTM2M5iD_I「泣き地蔵 / Vaundy：ミュージック・ビデオ」監督 MIZUNO CABBAGE、主演 笠松 将、二〇二一年一〇月リリース。

18 https://www.billboard-japan.com/d_news/detail/105026/2「Vaundy、最新テクノロジーで表現「泣き地蔵」MV公開」、ジャパンビルボード、二〇二一年一〇月一九日、画像引用元も同一。

（Webサイトの閲覧日はすべて二〇二三年一月二一日）

竹内幸絵（たけうち・ゆきえ）
同志社大学社会学部メディア学科教授。大阪港の海遊館の横にあったサントリーミュージアム［天保山］の学芸員として研究を始める。収蔵品の五〇〇〇枚を超すポスターと格闘するなかで、ビジュアル・メディアとしてのポスターの存在意義に目覚める。社会学者らと出会い、デザイン史と社会学を横断する研究を模索。大戦間期日本の広告研究を経て、現在は戦後日本の視覚文化研究、テレビ・コマーシャル研究に着手。二〇一四年から現職。著書に『近代広告の誕生——ポスターがニューメディアだった頃』（青土社、二〇一一）、編著『広告の夜明け——大阪・萬年社コレクション研究』（思文閣、二〇一七）、『開封・戦後日本の印刷広告『プレスアルト』同梱広告傑作選〈1949—1977〉』（創元社、二〇二〇）など。博士（学術）。

カメラは何を捉えたのか？

～ＮＨＫ『新日本紀行　地蔵盆のころ』（一九七三年放送）

小黒純

コロナ禍で中止が相次いだ地蔵盆はかつて、どんな様子だったのだろうか。一九七三年九月一七日に放送されたＮＨＫ『新日本紀行　地蔵盆のころ』には当時の貴重な映像が残されていた。京都・西陣の町（京都市上京区聖天町）の地蔵盆と地蔵祠を取り巻く人々の姿を、カメラが克明に捉えた。半世紀前の夏、子どもたちにとって、お地蔵さんも地蔵盆も、まさに「日常」だった。各シーンの概要と、テキスト化した全ナレーションで、約三〇分の番組を再現してみた。

■化粧をしたお地蔵さん

［シーン（S）］テーマ曲。顔に化粧が施された地蔵群のアップ。【図1】

［S］かがり火が舞う。護摩の火に札がくべられる。

図1

［ナレーション（N）］**夜空を焦がすかがり火は、盆を終わって祖先の霊をあの世に送る、送り火です。**

［S］大文字の送り火。

［S］京都市内の遠景と鐘の音。

［S］西陣の町の路地を三階建てぐらいの高さからカメラで撮影。男性が一軒ずつ予定を告げて歩く。「おはようございます。今晩七時から地蔵盆の寄り合いをします。来てください。お願いします」。

［N］**大文字の送り火が消えるとやがて京都の町にはもう一つの盆がやって来ます。子どもたちが待ちに待った地蔵盆です。**

［S］カメラが上から一階の高さまで降り、連絡役の男性を追う。家の引き戸を開け「おはようございます。今晩七時から地蔵盆の寄り合いをします。来てください」と声を掛ける。

［S］市電とバスや車が走る町角にある地蔵祠を映す。【図2】

［N］**京都の町はお地蔵さんの多い町です。**

［S］小さい川と橋。川辺にある地蔵祠。

［N］**その数は京都の街に五〇〇〇とも六〇〇〇とも言われ、どこの町内も大抵一つのお地蔵さんを祀っています。**

［S］別の町並み。地蔵祠。また、別の地蔵祠。

図2

［N］**お地蔵さんが祠から顔を出すのは、毎年八月の二二日と二三日、地蔵盆のときです。地蔵盆は町角のお地蔵さまと子どもたちのお祭りです。**

■旦那衆がそろばんを弾いて

［S］「本来地蔵盆は子どもさんのためやからね」などと、男性たち数人が家の中でテーブルを囲んで、地蔵盆の段取りを話し合っている。

［N］**西陣の老舗の旦那衆もこの日が近づくと、町内の子どものために頭を悩ます。**

［S］男性たちの間で「二日続けたらね…」「二日やりますか」「この前はね…」「お供えのことは…」などと相談事が飛び交う。

［N］**町内会の世話をする織屋のご主人に、糸屋さんに、染め屋さん。西陣の聖天町は戸数五二戸。町内のほとんどが西陣織に携わる家々です。**

［S］「ちょっと無理やと思うね。…三万円かけたら…五二軒、去年がね一軒平均値一二〇〇円ほどですわ」などと。そろばんを弾く。表紙に「昭和四十八年八月　地蔵盆収支帳」と筆書きされた台帳も。「今年は四三人…」「四回どないする…」「ちょっと（値が）張るな」「七〇円…八〇円…」

［S］家並みの屋根

［N］**織物に生きる家々が瓦を寄せ合う西陣。西陣の歴史はその昔、平安の貴族たちの織物を織った織部の司の職人たちが、この地に根を下ろしたのに始まります。**

［S］托鉢でお布施を受け取る僧侶。軒先で水撒きする女性の姿。

［N］**王朝文化から生まれ育ち、織物の町が出来上がってからおよそ五〇〇年。西陣は今も古い京情緒を残す町です。**

■織機の音

［S］祠の前で手を合わせる男性。頭を下げて、祈る。【図3】

［N］**織屋を営むタツミさんは今年、聖天町のお地蔵さんの当番に選ばれました。地蔵盆の日にはお地蔵さんを自宅に引き取って、母屋を町内の子どもたちに開放せねばなりません。**

［S］廊下と畳の部屋。山の形と「太」の文字をあしらった暖簾。

［N］**タツミさんの家はもう一三〇年もの間、西陣織の金襴や帯を織り続けてきました。**

［S］織物の機械が動き続け、女性職員が糸をたぐるなどしている。織機の音だけが流れる。

［S］「私はここはもう少し…」。テーブルの上に織物をはさんで、タツミさんともうひとりが話し合いをする。

図3

［N］**デザイナーが描いた文様を、何色の色糸を使って、どんな組織で織るか。紋図屋と呼ばれる設計屋さんとの打ち合わせです。**

［S］「ちょっと青が多いでしょう」「そうですな」「紫もちょっと多い…」「そうですな」「もう少し白を入れる方が明るくなる…」などと、タツミさんらの打ち合わせが続く。棚には何色もの糸束がある。二人とも白いワイシャツにネクタイ姿。

［S］女性職員による機織り。

［N］**機械化が進む今も、手の込んだ高級な禁断や帯は手織りで織られます。年産一三〇〇億円。西陣の一角には九〇〇〇軒を超す織物業者が集まり、毎日三万台の機織りが動き続けています。西陣織はいつの時代にも、名もない織子たちの手で、数々の芸術品が生み出されました。**

■町角で子どもを見守る仏様

［S］路地で遊ぶ子どもたち。三輪車、輪投げ、縄跳びなど。【図4】

［N］**西陣の子どもたちは、いつも機織りの音に囲まれて育ってきました。**

［S］地蔵祠の中のお地蔵さんのアップ。【図5】

［N］**お地蔵さんは町角で、子どもを見守る仏様です。死んだ幼子の霊は、三途の川のほとりの賽の河原に集まっているといいます。賽の河原で泣く子どもを**

図4

地獄の鬼から守ってくださるのがお地蔵様なのです。

［S］さまざまなお地蔵さんの近影。夜、いくつものお地蔵さんに添えられたろうそくの灯火。暗い声の男性の歌唱が続く。

■本家、壬生寺で

［S］男性の歌唱はそのままで、映像が壬生寺の地蔵群に切り替わる。

［N］**地蔵信仰が庶民の間に盛んになったのは平安時代の終わり頃と言われています。しかし、いつの頃からか、地蔵盆は子どもの安泰を願う行事から、子どもたちのレクリエーションの行事になりました。**

［S］壬生寺の境内に堆く積まれたお地蔵さんを、子どもたちが見て回る。

［N］**お地蔵さんの本家、壬生寺には地蔵盆の頃になると、お地蔵さんを借りに来る町内会もあります。何百年の歴史を含む京都の町にも、最近は団地や新興住宅地など、お地蔵さんを持たない町が増えてきました。**

［S］子どもたちと引率の男性が、お地蔵さん選びを進める。住職が「地蔵尊貸与受付」という表紙の台帳のページをめくり、記入する。

［N］**地蔵盆を前に、既に八二体のお地蔵さんが貸し出されました。**

［S］意中のお地蔵さんを抱えて、運ぶ。

［N］**やっと借りてゆくお地蔵さんが決まったのが、京都の郊外、向台団地の自治**

図5

会長さんと子どもたちです。団地の子どもたちにも町の子どもたちと同じに、地蔵盆の楽しみを味あわせてやりたいと、今年初めて団地主催の地蔵盆を開くことになりました。

[S] お地蔵さんを助手席に乗せ、子どもたちは後部座席に座り、車が壬生寺を出発。住職はお辞儀をして見送る。

■着々と準備

[S] タツミさんの自宅内。製作中の帯、糸巻きなど。

[N] **地蔵盆の前夜。タツミさんの家です。**

[S] タツミさんが室内に大きな提灯を吊るす。大きな木箱。

[N] **町内会の財産である地蔵盆の道具一式が運び込まれました。**

[S] 母親が小さな子に、漆器の説明をしている。「これねおつゆを張るのよ」「これお漬物」「これもねおかず載せるの」「あすは高野豆腐としいたけ。これにね、何を入れようかな、お母さん…」「何が好きかしら」。

[S] 鐘を持った男児を先頭に、約一〇人の子どもたちが路地を歩く。男児は短パン、タンクトップ姿。【図6】

[N] **八月の二二日。朝になるのを待ちかねた子どもたちは、触れの鐘を叩いて町内を回ります。お地蔵さんが祠から祭壇に移されるのを触れる鐘です。**

図6

[S] 高齢の男性が地蔵祠の扉を開けて、お地蔵さんを両手で挟んで中から取り出す。奥にあったもう一体をタツミさんが取り出す。

[N] **一年ぶりに顔を見るお地蔵さんです。いつの時代に誰が祀ったのかは、町内誰も知る人はありません。当番のタツミさんは今年四九歳になりますが、ひと粒種の依子ちゃんはまだ三歳です。**

[S] タツミさんともうひとりでお地蔵さんを抱え、家の中へ。壇に飾る。

[N] **「五年前、お地蔵さんの当番を引き受けたらやっと子どもに恵まれた」と、タツミさんは今年もありがたくこの役を引き受けました。**

[S] 子どもたちが壇に置かれたお地蔵さんを、少し離れた場所から見つめる。

■ふごおろし

[N] **町内会の予算は中学生までを対象にしていますが、早くから集まってくるのはやはり小さい子どもたちです。**

[S] ふごおろしの様子。民家の二階の部屋から、ロープづたいに景品の入ったかごが降りてくる。下では子どもたちが待ち構えている。「頭、当たります」「二〇番、ありがとう」と、かごから景品を取り出して、子どもに渡す。

[N] **ふごおろし。地蔵盆にはつきものの福引です。大人たちはこの日ばかりは家業を捨てて、子どものサービス役に回ります。**

［S］二階の部屋ではタツミさんらが、景品をかごに入れたり、ロープを引っ張ったりしている。地上レベルに達すると、大人がかごから景品を取り出す。

［N］**糸屋さんも、織屋さんも、染め屋さんも駆り出されました。それは自分たちが子どものときに味わった楽しみを、今の子どもたちにも伝えてやらねばならない。京都に住む大人たちの務めなのです。**

［S］かごの前には小さな人形が着けられており、ロープで移動する様子が映し出される。子どもたちは景品を自分の家に持ち帰る。【図7】

［N］**かごを背負った人形はお地蔵さんの遣いです。お地蔵さんが子どもたちにとって、あくまでありがたい仏様です。**

■数珠回し

［S］子どもたちが輪になって、手を叩きながら遊ぶ様子。「かごめ、かごめ」「鬼のパンツはいいパンツ」などの歌声。

［N］**西陣の街に限らず、この日は京都じゅうの路地裏が子どもたちの姿で賑わいます。**

［S］スイカ割り。目隠しをした男の子が、大人に助けられながら、両手に持った棒をやっと振り下ろす。【図8】

［S］子どもたちが寄り添って輪になって座り、念仏を唱えながら、膝の上で数珠

図7

図8

縄を回す。子どもたちは約三〇人。多くは浴衣姿。【図9】

［N］**地蔵盆が子どもたちの楽しみ本位になった中で、ただ一つの宗教的行事は数珠回しです。お坊さんを呼んで、子どもたちだけでお地蔵さんを供養します。数珠の房で頭を擦ると利口になるという言い伝えがあります。**

［S］僧侶は汗を拭いながら、読経を続ける。

■レンタル地蔵

［S］広場の一角にお地蔵さんが置かれている。提灯が飾り付けられ、女性がお供物をする。子どもたちが五〇人以上集まっている。

［N］**壬生寺から借り出されたお地蔵さんは、団地を見下ろす広場に飾られていました。団地の自治会で子どもたちにどんな催しがいいかアンケートしたところ、肝試しが一番の人気だったそうです。**

［S］暗い中で、明かりがついた提灯。男性が頭からストッキングを被っている。

［N］**自治会の会長さんが脅し役です。**

［S］虫の鳴き声。突然、やってきた子どもに「ウオー」と迫る。泣き叫ぶ子ども。逃げ出す子ども。

［S］獅子舞とお囃子。大きな拍手。【図10】

図9

図10

■うたかたの夢

［S］堀川通のイチョウ並木。

［N］**地蔵盆は、子どもたちの夏の日のうたかたの夢を満たして終わりました。**

［S］巻き上げた生地を肩に担いで、ゆっくりと道を歩く男性。行き交う車や自転車。

［N］**大人たちは仕事場に帰って、西陣の街にはまた機織りの音が響きます。**

［S］格子越しに商談の電話の声。「ご案内差し上げていると思いますけど、正月もののの…新柄ができまして。自分としても自信あると思うてますので。そうですか、お越しいただけますか？　よろしくお願いします。お待ちしてます」

［S］部屋に色とりどりの帯が並べられている。きらびやかな効果音が流れる。

［N］**一本に一ヵ月をかけて織り上げた帯がおよそ三〇〇本、一堂に並べられました。タツミさんが祖先から受け継いだ古い暖簾をかけての展示会です。**

［S］何人ものバイヤーが訪れ、品定めをしている。

［N］**目の効いた問屋さんたちの前で、作品の出来・不出来が問われます。正月用の鳳凰の帯も見事に織り上がりました。**

［S］「まいど、おおきに」「よろしくお願いいたします」。タツミさんが訪問客を見送り、おじぎをする。「ありがとうございました」。

［N］**地蔵盆が進むと京都も急に秋の気配を深めていきます。**

［S］壬生寺の地蔵群。テーマ曲が流れる。紅葉前のモミジを枝葉を重ねる。【図11】

※シーン（図1～11）は、ＮＨＫ京都ブログの【きょうとシアター】「新日本紀行　地蔵盆のころ」（二〇二二年八月二二日掲載）（https://www.nhk.or.jp/kyoto-blog/999/472233.html　二〇二三年一月三一日閲覧）から。

図11

小黒 純（おぐろ・じゅん）
大学卒業後、商社マン、新聞記者を経て、米オハイオ州立大学大学院で修士号取得。帰国後、共同通信記者として調査報道を手がける。二〇〇四年から龍谷大学、二〇一二年から同志社大学でジャーナリズム研究に携わる一方、ライブ感あふれる「記憶に残る授業」を目指す。JoMA研究メンバーとの関係も深く、多田実と一緒に、全学的な科目「メディア・プロフェッショナル実践講座」を担当。また、西村秀樹とは『テレビ・ドキュメンタリーの真髄』（藤原書店）を出版した。ファクトチェック&調査報道のサイト「InFact」、情報公開クリアリングハウスなど、ＮＰＯの運営にも関わる。地域の問題を追及する調査報道サイト「Watchdog」では編集デスクを務める。

撮影：西村 秀樹

西村 秀樹（にしむら・ひでき）

一九七五年慶應義塾大学卒業後、毎日放送に入社。主に報道局でニュースやドキュメンタリー番組を制作した。北朝鮮取材六回、植村直己の冬季エベレスト登山隊に同行取材した。退職後、近畿大学人権問題研究所客員教授。同志社大学と立命館大学で「放送論」などを担当した。また琉球遺骨返還請求訴訟をテーマにした映像作品『骨を還せ、魂を還せ』で、「韓国短編映画祭２０２３ベスト・ドキュメンタリー賞」を授かるなど映像作家として活動中。単著『北朝鮮抑留』（岩波現代文庫）『大阪で闘った朝鮮戦争〜吹田枚方事件の青春群像』（岩波書店）、デジタル出版『抗う人』（季刊・現代の理論）。共著『テレビ・ドキュメンタリーの真髄』（藤原書店）。

報告書　地蔵祠（じぞうし）・地蔵盆（じぞうぼん）は今（いま）

企　画　同志社大学 ジャーナリズム・メディア・アーカイブス研究センター
JoMA ── Journalism, Media & Archives Research Center

発　行　2022 年度「“諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ” 同志社大学 SDGs 研究」プロジェクト
京都の「地蔵祠」から学ぶ持続可能な地域コミュニティのあり方に関する研究
A Study on Sustainable Local Communities from “Jizoshi” in Kyoto

竹内幸絵 研究室
同志社大学 社会学部メディア学科
住所　602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル渓水館 402 号室
電話　075-251-3441（社会学部・社会学研究科研究室事務室）

発行日　2023 年 3 月 20 日

冊子編集　山本佳奈子（オフショア）
表紙デザイン　三宅 彩

企画 | 同志社大学ジャーナリズム・メディア・アーカイブス研究センター（JoMA）

発行 | 2022年度「"諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ"同志社大学SDGs研究」プロジェクト
京都の「地蔵祠」から学ぶ持続可能な地域コミュニティのあり方に関する研究
研究代表者　竹内幸絵　同志社大学社会学部メディア学科